

- 巻頭言——時間・空間の座標軸に位置づく確かなトランジッション…………… 1
Preface: Intentional transition plotted on the coordinate axis of time and space
- ある移住家族にみる「自然農法」的暮らし…………… 宮本 幹江 …… 2
A lifestyle like “macrobiotic farming” of a family moved *Mikie MIYAMOTO*
- 地域の再建を担う非地域住人による市民活動…………… 西村 俊 …… 10
Regional Movements of non-inhabitant toward Reconstruction of the Region *Shun NISHIMURA*
- 持続可能性を指向した中山間地域の活性化…………… 西村 俊 …… 14
Regional Revitalization Promotion toward
the Sustainable Local Community in the Hilly and Mountainous Areas *Shun NISHIMURA*
- ムギとイネの藁利用について——東京都東久留米市・小平市の事例——……………川上 香 …… 19
Utilization of wheat and rice straw
- Cases study in Higashi-Kurume City and Kodaira City, Tokyo *Kaori KAWAKAMI*
- 菜っぱのこと、種子のこと…………… 和田 千代 …… 22
About leaves and about seeds *Chiyo WADA*
- イヌガラシ属数種の種および種内分化…………… 伊藤 惇 …… 24
Inter- and Intra-specific differentiation of several species of genus *Rorippa* *Atsushi ITO*



サマイのインド亜大陸伝播 — 形態的形質とDNA多型による種内分化 — 大塚 啓太 25	
Dispersal of <i>Panicum sumatrense</i> in Indian subcontinent – Intra-specific differentiation of morphological traits and amplified fragment length polymorphism of DNA <i>Keita OTSUKA</i>	
キャンパスの自然的環境の評価 — 「学芸の森」の実態調査から — 齊藤 嵩之 27	
Evaluation of natural environment of university campus - based on a questionnaire to survey “Gakugeinomori” forest <i>Takayuki SAITO</i>	
「学芸の森」とはなんだろうか? 木俣 美樹男 29	
What is “Gakugeinomori” forest? <i>Mikio KIMATA</i>	
社会的共通資本としての森とむらの再生・活性化に関する提言～森林文化社会の再構築～ 財団法人 森とむらの会 31	
Proposals for the rebirth and activation of forest and village as a social commons - Restructure of forest cultural society Forest and Village Foundation	
山梨県小菅村植物調査標本リストNo.1 武井 尚 35	
Herbarium specimen of Kosuge Village, Yamanashi Prefecture I <i>Hisashi TAKEI</i>	
彩色園水田の生物調査リスト 小金井環境市民会議 環境学習部会「田んぼの時間」 39	
Flora and Fauna around the paddy field in Saishikien gardens, Tokyo Gakugei University Environment Learning Group of Citizens council for Environment in Koganei City	
編集後記 41	
Editorial note	



巻頭言 — 時間・空間の座標軸に位置づく確かなトランジション

Preface: Intentional transition plotted on the coordinate axis of time and space

自由や民主主義、個人主義は現代の市民社会が獲得してきた現代の社会思想である。自由は個人を基本とするが、それでも社会人としての責任が伴う。民主主義は衝突回避の良い方法で、話し合いによってとりあえずの妥協を探るために多数決をするが、少数意見を必ず尊重する。個人主義は利己主義ではなく、他の人もまた個人であるので、ここに個人主義としての思いやりがあるはずである。

人の世の歴史は繰り返すともいうが、それでも人は文化的に進化し、よりよい社会システムを広げていくのだと思う。しかしながら、他方では自由や民主主義、個人主義を圧する社会的衝突が繰り返されているという現実がある。私たちは歴史的な時間軸と現代的な空間面に生きており、短い人生において、この日常から逃れることができる人がいても、それはとても少ないだろう。欲望は人を良くも悪くもするので、欲望は知的な個人の意思で制御する必要がある。他から強要される規制でないことが、自由や民主主義、個人主義を活かすことである。

科学は、現場において実物を観察、調査、実験するなどによって事実を明らかにし、これにのみ基づいて考察し、真理を導くものであってほしい。たとえ、実験結果の解釈を誤ったとしても、元の事実には虚偽が入らないはずである。科学者は正直に虚偽のない意見を言うべきであり、また、分らないことは解らないと言ってよい。ところが、社会は事実に沿わないことを求め、正直な意見は規制され、黙殺され、不都合な事実は歪曲され、隠蔽されてしまうこともある。環境に関する課題解決には科学的事実を公表することにおいて公正さが求められる。

ピーク・オイルを過ぎたといって、すぐに石

油がなくなるわけではない。特に、精製された石油製品はとても便利だから、どれほど製品の価格が高くなっても、航空機燃料などの特定用途には欠かせないであろう。

1世紀に満たない石油製品の利用は徐々に縮小していき、それより長いトランジションの時代が来るのであろう。地震、津波、台風、洪水などの自然災害とこの国では共存せねばならない。恐ろしい自然は一方で水や森、多様な生物という豊かな恵みをもたらしている美しい自然でもある。

福島の子力発電所の崩壊を侮ってはいけな。単なる事故ではなくて、広範な陸地も海洋も放射性物質で汚染している。放射線は生体に損傷を与えるばかりか、生殖質に変異を起こさせるので、末代にまで影響を与える。たとえ低レベルとはいえ、東京とてすでに汚染されており、私たちは被爆から逃れて暮らすことができない。

国際民族生物学会が開催されたフランスのモンペリエは生物文化多様性を大切にしている街であった。時期を同じくして生物多様性フェスティバルが開かれ、コムギやイネの多様性保全、トランジション・タウンの展示もあった。トランジションは不公正、不平等、不自由な社会的慣習を含む封建社会に戻るということではなく、地域社会固有の伝統的知識から学び、未来につながるように「素のままの美しい暮らし」を再発見、再創造することである。人類を存続させたいのなら、伝統的知識に敬意を払い、科学的知識ばかりを偏重しないで、双方の共存を受容することである。

2012. 07. 01

木俣美樹男 Mikio KIMATA



ある移住家族にみる「自然農法」的暮らし

宮本 幹江（時遊編集舎）

A lifestyle like “macrobiotic farming” of a family moved

Mikie MIYAMOTO, Jiyu-hennshusha

筆者は2010年5月に、東京小金井市から同居人とともに愛媛県大洲市に移住した。聞いたことのない地名で驚かれるかもしれないが、なんのことはない。30年ぶりに生家に戻っただけのこと。しかし、その環境は東京郊外のそれとはあまりにもかけ離れている。

まちの中心部から20キロ弱、車で20～30分のところにある山に囲まれた戸数8軒の集落である。住人は20人ほど。60歳以上の人が半数を占めている。中山間地なので農地も狭く、農業、ましてや林業では食べていけない。大工や石工という職業の人もいるが、現役世代の人はみな集落外に働きに出ていて、週末に稲や自家用の野菜をつくるという生活である。

◎慣行農法への違和感から

さて、わが家もわずかながらに畑があり、母に教わりながら自家用の野菜を作っている。その作り方のベースは「慣行農法」といわれるものである。慣行農法は、従来のやり方に従って、化学肥料や農薬などを適宜用いながら作物を栽培していく。その目指すところは、大きい、収量が多い、甘い（味がよい）、見た目にきれいといったところであり、一般のスーパーマーケットに並んでいる見栄えのよい野菜や果物は、ほとんどがこの農法で栽培されている。

広い面積をもつ平野部の農家では、大型農機具を使って単一品種を大量に育てるため、虫害や病害に遇いやすく、農薬や肥料を「無」にすることは難しい。安定した作物を安価に提供するには、慣行農法の技術が必要なこともよくわかる。

ただし筆者は、中山間地にあるわが家がこの農法を取り入れることに疑問を抱いていた。家



族3人が食べる量さえできればよい（立派な大きな野菜はいらない）のだし、もっと環境負荷の少ない農業はできないものか。無農薬栽培については早くから共感していたが、5年ほど前に埼玉で栽培されていた無施肥野菜のおいしさを知ってからは、化学肥料に対する不信感が一段と強くなっていったのだ。

一方、最近は「有機農法」で栽培された農作物もよく見かける。これは化学的な肥料や農薬を用いず、堆肥や緑肥などを用いる。あわせて、輪作などをして土壌の生産性を上げることで、さまざまな病気（連作障害）を回避するやり方である。堆肥や緑肥には肥料という面ばかりでなく、土を柔らかくする土壌改良目的も含まれている。

◎愛媛は自然農法の発祥地

そんななか、以前から気になっていたのが、「自然農法」といわれる農法である。提唱したのは、ふくおかまさのぶ福岡正信さんだ。福岡さんは1913年に現在の愛媛県伊予市に生まれ、横浜税関植物検査課や高知県農業試験場などを経て、1947年から生まれ故郷の愛媛で帰農。横浜時代の25歳のとき、生死をさまよう病気をしてたどりついた「無」の境地から、植物を自然のままの状態ですべて育てる農のあり方に向かい、愛媛で2008年に没するまでその研究と実践に身を投じた。

福岡さんは「現代の老子」とも称され、生き



方を含めて信奉する人がアジアを中心に世界各地にいるという。筆者は同じ愛媛出身でもあり、環境運動家にも一目おかれている福岡さんの自然農法に前から興味をもっていたのだが、東京時代にその現場を訪ねる機会は与えられなかった。そうしたところ、やっと「自然農法」に巡り会うことができた。

大洲市の隣町の内子町で「菜月自然農園」を営む和田満広さん(50)、雅美さん(46)夫妻である。知人の紹介で知り合い、さっそく話を聞くため2012年の2月下旬に訪ねた。0場所は内子の中心部から2キロほど、松山と宇和島をつなぐ幹線・国道56号線から北に1キロほど入ったところで、わが家とちがって交通のアクセスはとてもよい。もとは巨峰の「観光ブドウ園」だった1町歩(1ha)の土地を2005年1月に買い取り、今は杏月ちゃん(10)、静空ちゃん(2)の女の子2人を含め、家族4人で自給的農生活を送っている。

◎自給的農業でシンプルに暮らしたい

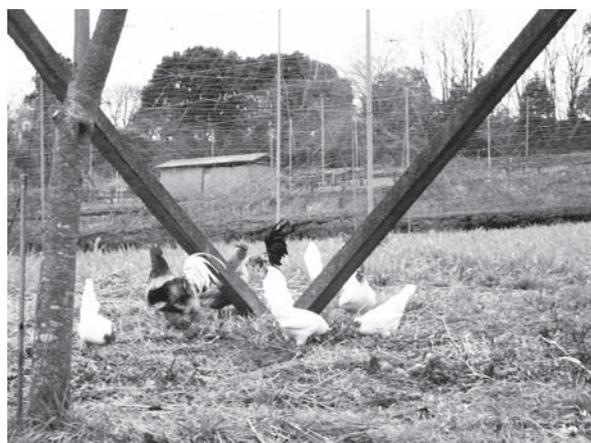
自然農法の話に入る前に、和田夫妻がこの場所にたどりつくまでを簡単に振り返ってみよう。ご主人の満広さんは1962年、愛媛県大洲市生まれ。高校卒業後、松山の印刷会社に就職し、技術者として20年間勤務。サラリーマン時代は宴会大好き、趣味は空手とテニス、旅行、アウトドアなど。ご本人によると「好きなこと

をとことん楽しむタイプ」だったという。

一方の雅美さんは1965年、愛媛県西条市生まれ。中学生から松山暮らしになり、大学卒業後は松山で「自分には向かないなあ」と思いながらも銀行に勤務。30歳を前に退職し、オーストラリアに2か月半、自分探しの旅に。その後、松山に戻ってまもなく、テニスを通じて満広さんと知り合い、1995年に結婚した。

「二人でNPO法人ネットワーク地球村(事務局=大阪)の活動に関わるなかで、環境や教育、戦争と平和など、世界中で問題になっていることの“根っこ”は同じなのではないかと気づいた」と雅美さん。根っこにあるものとは、「シンプルに生きること=小さな単位で経済が回るような社会のあり方」である。要するに、理想は「お金をなるべく介在させない暮らし方」であり、それに少しでも近づくためには「自給的農業をベースにした暮らし以外にない」という答えにたどりついたのである。

二人は先に紹介した福岡さんの著書『無Ⅲ 自然農法』や、脱サラして徳島で有機農法を実践していた今関知良さんの『百姓になりたい』などを読んで、就農の場所探しを始めた。愛媛県農業会議で手に入れた「新規就農事例集」に紹介されていたNさん(大阪から内子町に移住し、自然農法で就農していた)を1999年秋に訪ね、最終的に内子を選んだ。理由は、主に以下の6つによる。



菜月自然農園にはニワトリも。卵は毎日産まないが、いるだけでなぜかのんびりした気持ちになる。奥は小麦の畑。もとはブドウ畑で、ブドウの木は撤去したが、棚はそのまま残し、小麦と陸稲を二毛作で栽培している。



2012年1月終わり頃の菜月自然農園の畑。露地栽培が基本で、1列ごとに種類をかえて植え、草も一緒に育てる草生栽培となっている。



1. 自給的農業をするのにいいと考えられる中山間地域である。
2. 地域の人たちの人柄があたたかい。
3. 外から入ってきた新規就農者がすでに数名いる。
4. 町が「環境保全型農業」を推進している。
5. 産直市場「フレッシュパークからり」が成功し、農家がイキイキしている。
6. 自分たちが長年すごした松山から車で1時間ほどの距離にある。

◎ラケットを鍬（くわ）に持ち替えて働く

1999年12月末に満広さんが会社をやめ、本格的に農地探しに入り、2000年3月11日に内子町内（現在とは別の場所）に引っ越してきた。古民家に5反（50a）の田畑を借り、翌日には早速、じゃが芋の植え付けを行ったという。

「二人で、ラケットを鍬に持ち替えたわけだよ」と満広さんは言うが、二人とも実家は農家ではなく、農業はまったくの初めて。農作業のあれこれについては満広さん、ブログでの発信や農産物加工については雅美さんというふうに分割を分担して、とにかく朝早くから畑に出て、夕方まで働いた。とくに夏場は夜暗くなるまで作業していたので、「近所の人やビールやら、ふかし芋やら、いろんなものを差し入れてくれた」という。

自然農法とはいっても、いや自然農法だからこそというべきか、それぞれの土地環境にあった野菜づくりをしなければならない。気候も土質も異なるため、特に「いつ種子を蒔くか」というのは大事なこと。それさえ間違わなければ、あとは植物（種子）の力で育つという。

農作業は、壁に掛けてあるカレンダーではなく、「ネムノキの花が咲いたら大豆を蒔く」というように、周囲の自然の変化を暦代わりにする。和田さんたちは近所の人や畑のそばを通るたびに話しかけて、そうした土地に残っている「農作業の習わし」を教えてもらったという。「これぞまさしく慣行農法！」と叫びたくなるくらいだ。

そうやってご近所の人たちにも支えられ、ま

た独学で関連書物を参考にしながら、和田さんたちは少しずつ自分たちの自然農法を手探りしていった。ただ、問題は家と田畑が遠かったこと。中山間地にはまとまった平野が少ないので、田んぼは水利のよい川沿いに、畑もまとまった広さだと自宅とは離れた場所にならざるを得ない。そこで、3年目から家と畑がセットになった場所を探すことに。「フレッシュパークからり」にポスターを貼らせてもらったり、酒の1升瓶を片手にありとあらゆるツテを頼ったりと、理想の土地を探し回った。そこで出会ったのが現在の場所である。引っ越してきたのは2005年4月のことだった。

◎菜月自然農園の自然農法とは

一般的にいわれている自然農法とは、①不耕起（耕さない）、②不除草（除草しない）、③無施肥（肥料を与えない）、④無農薬（農薬を使わない）が基本になる。現在、自然農法を取り入れて農産物を作り、それを自家用にしたり、宅配サービスなどで固定客に届けている人は日本各地にいる。

ただし、先にもふれたように農作業は気候風土と結びついているため、その方法は実践者によって異なり、各人がそれぞれに工夫して自分なりの自然農法を行っているのが現状だ。

さて、菜月自然農園ではどうだろうか。満広さんにとっての自然農法を定義してもらおうと、「植物本来の生命力で自然に育てる農法」という答えが返ってきた。百姓は百通りという満広さんのやり方を、具体的にみていこう。

① 不耕起：土を耕さない

その一番の大原則が、土を耕さず、草とともに育てる「不耕起・草生栽培」である。「農業は土づくりから」の言葉があるように、よく耕して空気を送り込み、土を掘り返して深い土中の悪い菌を太陽光に当てて消毒するのは、よい土づくりのための土台だと思っていたのだが、満広さんはそうではないと否定する。

自然農法では、土の中の小動物や微生物、土壌菌などの生態系が壊されるので、「耕すこと」



はよくないと考える。要するに、「耕作」は自然な形ではないのだ。自然界では、その土壤環境に適応した植物が育って実をつけ、それが土に落ちてまた翌年も芽を出す。自然農法はただこの法則に寄り添うだけなのである。

しかし、和田さんたちの現在の畑は、農薬や化学肥料を使って栽培してきた観光ブドウ園だったため、土が堅かった。そこで、最初の年だけは鶏糞・米ぬか・おからを撒いて、トラクターで耕したそうだ。畝も立てて、水はけをよくした。梅雨のときに病気になるからだ。

その後も後述するように、少量のボカシ肥だけで栽培しているが、これによって地力を上げるのが目的である。この場合、「地力が上がる」とは、人為的に加えられた余分な肥料成分が抜けてきて、自然本来の土の状態に戻ることに。堅く締まった土ではなく、手でさわるとやわらかい土のことである。

水稲については、以前の田んぼ(5a)をそのまま借りていて、これも不耕起・草生栽培である。まず、最初の年の秋に5メートルおきぐらいに排水溝を掘り、クローバーの種子を蒔く。そして翌春、稲の種籾を「石灰1+泥5」の割合で混ぜた粘土でくるんで「種団子」を作り、クローバーが広がっている田んぼに条蒔きしていく。そのあと、稲の芽がそれなりに伸びてきたところで、田んぼに水を張ってクローバーを弱らせ、稲を育てていく。秋の刈り取り後には田に稲わらをふり、クローバーが再生してくる



畑には武蔵野の伝統野菜「のらぼう菜」があってびっくり。種子は埼玉県飯能市の野口種苗店で入手したという。

のを待つ。本当は水稲+小麦の二毛作にしたかったそうだが、田んぼの排水が悪いので、湿地を嫌う小麦は難しいという。

② 草生栽培：草と一緒に育てる

不耕起とセットになっているのが、草と一緒に育てる「草生栽培」だ。草があると肥料分を吸い取られる気がして、ついきれいに抜き取ってしまいがちだが、草も一緒に生きているのが自然なのである。

自然界では、夏草は冬になると枯れて、そのまま地面に伏せて積み重なる。春になると、枯れ草の中から、新芽がまた顔を出す。冬草は半年ずれて育つわけで、つまり常に青い草がある。枯れ草は雨に遭い、微生物やミミズなどの小動物によって分解されるが(これが肥料分になる)、そうした繰り返しによって世代交代していくのである。

自然農法も基本的にはこの流れを踏襲していて、そこに育った草はその場に戻す。しかし、土を掘って埋め戻すのではなく、ただ地面の上に重ねるだけである。野菜の収穫途中ですでに出る枯れた葉なども、同じように畝の上においておく。

草生栽培は自然界の真似をしているのだが、実際にはメリットもある。草が生えていることで、土の乾燥を防いでくれる。天然のマルチング(土を覆うかぶせもの)の役割を果たしているのだ。

和田さんの畑では、野菜などの種を蒔いたあと、苗がまだ小さいときだけ草を引き抜いて、その場に裏返して(根を上にして)置いておく。その後も、とんでもなく草が大きくなって、野菜の成長を明らかにジャマしているときだけ、地上から出た部分だけを刈り取るそうだ。草を根ごと引き抜くと、土中の生態系を壊してしまうからである。ただ、野菜がある程度大きくなると、今度は草があまり生えなくなるという。

ちなみに、和田さんが持っている農機具は、エンジンタイプの草刈り機(刈り払い機)とハーベスター(自走式の脱穀機)だ。畑の標高は150メートルほど。四国は夏暑いので、草の伸びがハンパではない。そのため、畑が草に覆



菜月自然農園で育てているもの

穀類	水稻、黒米、陸稲、小麦、タカキビ
豆類	大豆、小豆、その他の豆
野菜	ナス、ピーマン、キュウリ、オクラ、中玉トマト、かぼちゃ、にがうり、モロヘイヤ、バジル、シソ、イタリアンパセリ、ネギ、ミョウガ、ニンニク、しょうが、スイカ、そうめん瓜、冬瓜、実エンドウ、空豆、スナックエンドウ、たまねぎ、大根、人参、かぶ、ごぼう、白菜、ブロッコリ、キャベツ、高菜、水菜、小松菜、ほうれん草、のらぼう菜、レタス、サニーレタス、ごま、唐辛子、ハイビスカスローゼル
芋類	ジャガ芋、里芋、サツマ芋、ヤーコン、キク芋
果実類	梅、ブルーベリー、イチジク、柿、スモモ、ブドウ、キウイフルーツ、アケビ、オリーブ
その他	茶、和綿、シイタケ 他

われそうになる。冬だけを除いて、草刈り機はフル稼働である。

③ 無農薬でボカシ肥をほんの少し

農薬は一切使わない。肥料については基本的には無肥料だが、野菜畑だけは、町内の豆腐屋と米屋でもらった「おから」と「米ぬか」を発酵させた「ボカシ肥」をほんの少し土の上においている。ただし、「地力が上がってきたら、こうした肥料も減らしていきたい」と満広さんは話す。

それは、害虫やさまざまな病気対策についても同じだ。自然農法の基本は、多品種を少量ずつ栽培するという。1つの野菜を植えるのは1列か、多くても2列として、いろんな野菜を隣り合わせて育てる。自然界でさまざまな植物が共生しているのと同じように、植栽に多様性をもたせるのである。

そのように育てていると、土の中の菌類や小動物、昆虫などを含めたひとつの生態系が出来てくる。「生態系が出来上がったら、虫取りをしなくても大丈夫。もちろん虫はいるのですが、大量には発生しませんから、野菜への影響は少ないんですよ」。

ブドウのなかでも巨峰は、無農薬で育てるのは絶対に無理。そのため、和田さんの畑でも最初は虫をほとんど見かけなかったという。「1年目はわざと草ぼうぼうにしたら、クモがたくさん戻ってきて、2～3年でカエルやトカゲ、ヘビなどの爬虫類もよく見かけるようになりました」と満広さん。雅美さんも自然のよみがえる力は本当にすごいと、びっくりしたという。

けれども、葉もの野菜は要注意だ。白菜はヨトウムシやカタツムリが苗を食い荒らすので、見つけたら手で取る。地力が上がってくると、連作障害も減ってくる。トマトやゴボウ、エンドウなどは連作すると病気が出やすいので、別の場所に植えるようにしているが、他の野菜はそれほど気を使わなくても大丈夫だという。

虫害ばかりでなく、獣害も大きな問題になっている。中山間地ではイノシシ、シカ、サルなどの被害が報告されているが、和田さんの農園でもイノシシが現れる。そこでやっているのが、周囲を電気柵で取り囲むこと。しかし、草が伸びて電気柵にふれるとそこから漏電するので、夏場は草刈りがとても忙しい。また季節を通して、夜間だけでなく、昼間も通電したままにしているそうだ。そのほうが効果があるという。

④ 地力が上がれば、収量も上がる

自然農法が環境にも人間にもよいのは理解できるが、収量はどうなのだろう。自家用なら気にしなくてもよいが、販売となるとそうも言っていられないのではないかな。

「確かに、隣に有機農法の野菜が並んでいたりすると、わが家のは見た目も小さいし、見劣りしますね」と雅美さん。「しかし、白菜だっけきちんと結球するし、手に持つとずっしりと重い。中身が詰まっているんですよ」と満広さんが続ける。

土の中にある自然の肥料成分がゆっくと効いていくから、成長が遅い。そのため、密度の濃い野菜になるのだろう。ちなみに、20年ほど自然農法で栽培している同じ内子町の先輩Nさ



んの畑では、大きな野菜が育っていたので、土が自然の状態に近づけば収量も上がるのかもしれない。

そして、自然農法で欠かせないのが、生命力のある強い種子である。和田さんは固定種の自家採種をしているが、よい固定種がない野菜については町内の種苗店でF₁（一代交配種）を購入している。また、インターネットで固定種を取り寄せたり、年に2度ほど仲間たちと種子交換会も開いているという。

◎野菜はほとんどが販売用

菜月自然農園で栽培しているものは全体で100種類ほどあり、主なものは別掲のとおり。米と大豆はほとんど自家用だそうだが、野菜については自家用はほんの少しで、販売用が主となっている。和田家の収入は、自家製野菜と後述の手作り加工品などの売上げである。内子に来てから最初の5年ほどは週に1回の割合で、車で約1時間の松山市にある20軒ほどの家に、季節の野菜セットを配達していたそうだ。

また、土日と祝日を中心に内子町の産直市場「フレッシュパークからり」に野菜を出荷し、さらに松山市内で毎週開催されていた「朝市タムタム市」にも出店していた（2011年に惜しまれつつ閉じてしまったので、同年暮れからは別の場所で、和田さんたちが主体になって「松山三津浜ワニナルバザール」を立ち上げている）。

2005年に今の場所に移ってからは、旧ブド

ウ園の土づくりのほかに、自分たちで家づくりも始めたため、車での宅配を中止。生産体制が整ったところで、インターネットでの受付け＋宅配便による野菜セットの販売に切り替えた。基本は隔週届けで、送料別1,500～2,000円ほど。野菜の食べ方や料理法を紹介する「農園だより」も同封し、野菜が少ないときは切り干し大根やジャム、焼き菓子などの加工品もセットしている。

お客さんは東京や福岡など、愛媛以外の人も多い。化学物質過敏症などで市販の野菜が食べられない人から問い合わせなどもあり、「この野菜以外は食べた気がしない」という大勢のファンに支えられている。

この他にも後述するように、自宅の広場を開放して月に一度の「丘の上の日曜日」、そして年に一度の食を中心とした「手づくり市」を開催している。だが、これは収入のためというより、「自然のよさ、手づくりのよさを知ってもらいたい」という思いと、ネットワークづくりがメインになっているようだ。

◎自家産・県産素材で加工品を作る

菜月自然農園でとれた農産物は販売のほかに加工品にも用いられる。まず大豆。これはほとんどが味噌の材料として使われる。雅美さんは年に2回、麹菌がよく働く25℃くらいの気温になる4月と8月に、麹から起こして味噌を仕込む。和田家では朝昼の2回、味噌汁を作るため、



現在も建築中という和田家の自宅（木造2階建て）。木組みの構造と屋根だけは地元の大工さんをお願いし、壁からは自分たちで塗った。



次女の静空ちゃんは、台所の土間下にある芋倉が大好き。中には稲の籾殻が敷かれていて、フタが開けられると、そこに飛び込む。



お味噌はいくらあっても足りないほどなのだ。

味噌づくりはすべてを手で行おうとすると大変で、一人でやるよりも、わいわいしゃべりながらのほうが楽しい。そこで最近はブログで呼びかけ、数人で仕込むようにしているという。

雅美さんが作る加工品は味噌のほかに、漬け物、梅干し、自家製酵母のパン、お菓子、ジャムなど。使う材料には、できるだけ自分たちが育てたもの（少なくとも1品以上）を用い、続いて身近な内子町産、県内産のもの。たとえば、パンやお菓子に使う小麦粉も自宅で育てた小麦を粉にしている。グルテン含有率が薄力粉より少し高めの中力粉タイプなので、その分もちりとした焼き菓子ができる。パンも市販のパン酵母ではなく、自家製小麦粉に水を加えて酵母を起こしているの、発酵力はさほど強くないが、小麦本来の味が味わえる。

また同様に食材でも、バターではなく菜種油

のように、植物性のものを使うようにしているのも特徴だ。乳製品を使わないのは、牛の乳は人間のからだには負担になると考えているから。卵も多くとりすぎると負担になるので、お菓子をつくるときに内子町産のものをときどき使う程度となっている。

◎家も土壁塗りから自分たちで

和田さんたちが内子町で自然農法を初めてから、丸12年が過ぎようとしている。最初は夫婦2人だけだったが、移住1年後の2001年には長女の杏月ちゃんが誕生。雅美さんは、3か月目から畑に連れていったそうである。その8年後に、今度は次女の静空ちゃんを自宅で、なんと家族だけ（助産婦さんなし）で出産した。

和田家の基本は「非対立の姿勢で、なるべくお金の依存しないで暮らすこと」。自然農法だとたくさん収穫できないので収入も少ないが、食べものはできるだけ自分たちで作り、出費も少ない。お金のやりとりで代わるものが、仲間たちとの交流だ。みんなでいろんなものを分け合い、交換する。そんな暮らしをしていきたいという。

食だけでなく、住まいも同じ考え方だ。現在の住まいは、棟上げのところまで地元の大工さんに建ててもらい、それ以後の土壁塗りから自分たちで手作りしている。完成は8割方といっ



毎月最終日曜日には「丘の上の日曜日」が開かれている。家族連れや若いカップルなど常連が多く、情報交換の場にもなっている。(写真は2012年1月のもの)



「丘の上の日曜日」での和田さんファミリー。左から、満広さん、杏月ちゃん、雅美さん。この日は自家製パンのサンドイッチ、干し柿のパウンドケーキ、ジャム、季節の野菜などが並んだ。雅美さんの手作り品にはファンが多い。



たところで、まだまだ進行中。「100年以上もつ家」を目指している。

床下には籾殻の炭が大量に敷いてあるし、冬の間、芋などを凍害から守るための芋ツボも地中に掘ってある。もちろん電気や電話は引いてあるが、電気を使うのは最低限。冬場の暖房は薪ストーブだし、夏場は冷房なしで、窓を開けて風を通す。真夏でも、うちだけで過ごせる家である。

料理には薪、炭、そして(プロパン)ガスも使う。冬は薪ストーブに鍋を載せて料理するため、あまりガスは使わない。夏はけっこうガスも使うが、やはりメインは薪ストーブ。販売用のお菓子やパンは、食品加工所にあるガスオーブンを使っている。ピザなどを焼く石窯もあるが、日常的に使うのは大変なので、イベントや来客があったときだけになってしまったそうだ。

◎自給的農業の輪を仲間たちと

松山・内子を中心に、和田さんたちの暮らし方に賛同する人が増えている。雅美さんのブログでファンが増え、自宅隣にある畑の中の広場を開放して開催する月に一度の「丘の上の日曜日」には、遠くは高知などから毎回15軒ほどの出店がある。

さまざまな果物や野菜、カレー、うどん、ラーメン、巻き寿司、サンドイッチ類、焼き菓子、パン、ジャムなどの食べもののほかに、木工やガラス細工などのクラフト作品、床屋さん、マッサージ屋さんなども出店し、和田さんの畑を見て歩く「畑のお散歩会」も開かれている。

さらに、11月には年に一度の「手づくり市」が開かれ、こちらはいつもの出店に加えて、コンサートや紙芝居、人形劇、手編みのカゴづくりなど参加型のものも多く、たくさんの家族連れで大賑わいである。この手づくり市は、和田さんたちが現在の場所にやってきた2005年11月から始めたもので、最初は人が集まるかなと心配したそうだが、200人ほどが来てくれ、翌年から倍々に増えていったそうだ。他にも、平和や環境問題についての勉強会を開催したり、東日本大震災による原発事故の被災者を受け入

れたり、幅広い活動が続いている。

「自分たちと同じような思いをもつ仲間たちを増やして、お金の依存しないで生きられる仕組みをつくりたい。農作業もみんなで助け合っで行い、収穫をみんなで喜びあえれば……」と、将来の夢について語る満広さんと雅美さん。ささやかな夢に思えるが、もしかしたら世界を変える大きな現実になるかもしれない。

取材もそろそろ終わりかなというとき、気になることを聞いた。長女の小学4年生の杏月ちゃんが小学校に行きたがらないというのである。「子供がやりたいかどうかに関係なく、カリキュラムに沿ってやらせる管理教育は、子供にとって大きなストレスになっているのではないですか」と、雅美さんは話す。教育もそろそろ仕組みを変えるときにきていて、子供自身がそのサインを出しているのではないかと。

「家ではお手伝いや好きなお菓子づくりを通して、さまざまなことを学ぶことができ、明るくのびのび過ごしています。自然体で楽しいホームスクーリング、という感じですね」。社会のあり方に疑問を持ち、生き方を変えた和田さんたちにとって、教育のあり方に疑問を持ち、それが子育てにも反映されることは、当然の流れということのようだ。

今回の取材は、自然農法の現場を見せてもらうことが一番の目的だったが、当然ながらそれは生き方、暮らし方と大きく関わるがよくわかった。残念ながら、今後も農業の現場で自然農法が大勢を占めることはないだろう。しかし、2011年3月11日の大震災や原発事故もあって、和田さんたちのような自然農法的ライフスタイル（自給的農生活）が少しずつ広がっていくことは間違いのない。それを大きく確信する取材となった。

◎菜月自然農園のこれまでと現在については、

下記URLをご参照ください。

- ・菜月自然農園 新規就農日記
<http://www.d1.dion.ne.jp/~yamatom/>
- ・菜月自然農園のブログ
<http://nazukizuzu.blog12.fc2.com/>



地域の再建を担う非地域住人による市民活動

西村 俊

(北陸先端科学技術大学院大学マテリアルサイエンス研究科)

Regional Movements of non-inhabitant toward Reconstruction of the Region

Shun NISHIMURA

School of Materials Science,

Japan Advanced Institute of Science and Technology (JAIST)

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の地域復興支援を機に、それまでボランティアに携わったことがなかった人々の間にもボランティア活動が広く浸透したことから、『1995年は日本のボランティア元年』と言われることがあります。2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴う津波被害（東日

本大震災）の復興支援では、さらに多くの市民が被災地へ足を運び、現在もなお被災地・被災者支援が続いています。

このように、災害時における地域外住人による支援活動が広く注目を集めています。一方、日々の生活の中にも地域外住人による市民活動が主軸として地域を支えている事例があります。ここでは、非地域住人による地域再建に向けた活動について、東日本大震災復興支援での活動や農山村での事例を紹介しながら、話題提供を行いたいと思います。



図1 散在した瓦礫（南三陸町）

◎震災復興を担う支援活動

方々に散在した瓦礫の回収（図2）や分別（瓦礫処理）、塩害にあった農地や果樹園の表層土の撤去、救援物資の仕分け・積み込み・配分など、多くの人手を必要とする作業が被災地にはあります。この他にも、避難所での炊き出し、子どもや高齢者との遊び相手・話し相手、排水



図2 瓦礫回収の様子（石巻市）



図3 支援物資の振り分け（南三陸町）



溝や家屋からの泥出し、水産物加工場の魚介類の撤去など、それぞれの被災状況によって、必要な支援活動の種類と量は大きく異なっていたようです（家屋ごと流された地域では瓦礫の撤去、家屋の浸水被害が多かった地域では住宅内の泥出しや家具の搬出、港では漁業資材の分別など）。

避難所では、被災者のお母さん方が給仕を分担しながら、県外ボランティアがリーダーとして物資やボランティアの作業割り振りなどを行っていました（図3）。

震災から1年以上たった現在では、重機や専門家による支援へ移行した部分もありますが、津波被害にあった田畑からの瓦礫の除去、避難区域が解除された地域の瓦礫処理等が求められているようです。

◎山村の人工林整備を担う市民活動

かつて日本の主要産業の一つであった林業は、1960年の木材の輸入自由化に伴い、国産材から安い外材へ消費が移行したことをきっかけに、産業としての維持が難しい状況に置かれてきました（1955年には95%あった木材自給率も、現在は20%程度）。

人工林が換金植物ではなくなったことで、一次産業から、二次・三次産業への従事者の移動が進み、人口の流出、さらには管理を続けるべき人工林の荒廃が、日本各地で深刻化しています。山仕事は主に、植林、下草刈り、枝打ち、つる切り・除伐、間伐、主伐、搬出、乾燥・加

工という行程が必要で、苗木作りから製材するまでにおよそ50～100年の歳月を要します。山林の手入れが不十分になると、山崩れや水源環境の悪化を招く恐れがあります。

農山村の森林荒廃を打開する活動の一つとして、週末を利用した非地域住人による山林整備活動があります。「浜仲間の会」（代表：南淳人）は1987年に発足し、東京都檜原村を拠点に地権者の了解のもと、1年を目安にそれぞれの所有林の整備を担っています（図4～6）。メンバーの多くは中年男性で（社会人と定年後の人が多い）、都市部から作業日に電車やバスで通う人が大半を占めていました。技術の習得や、山や自然と向き合い感得する場として、それぞれのメンバーが活動を楽しみながら多くを学び、感じ、考えていたように感じます。

浜仲間の会のような市民団体以外にも、水道局の水源林保全活動、森林組合の活動支援、企



図4 荒廃山林の整備



図5 間伐前のヒノキ林（光が入らない）



図6 下草刈り（若木周囲の草を刈る）

業のCSR等、同様の活動が広がっています。「レジャー林業」という言葉もありますが、山村の森林環境の改善・保全活動として、非地域住民による週末を利用した森林整備活動の意義が時代とともに増しているように思います。

◎休耕地の利活用を担う市民活動

富山県富山市根上地区で活動を行っている「(有)土遊農」(1994～)は、東京でサラリーマン勤めをしていた橋本夫妻が、かつて「草刈り十字軍」として作業した地に移り住み(1981年)、中山間地農業の再生を願い、農業を志したことがきっかけで続いている活動です。

現在は『有畜循環型複合農業』(養鶏場で出た糞を田畑の肥料に用い、田畑で出た稲くずや米ぬかなどを養鶏の飼料に混合する循環型農業)を主軸に、養鶏場(鶏800羽、ヤギ1頭、有機飼料)、水田(500a、合鴨農法など)、畑(各

種野菜、小麦など、農薬・化学肥料不使用栽培)、加工品を手掛けています。

幼児・児童への体験学習(陶芸、農業体験など)や研修生の受け入れにも積極的で、インターンや農業に転職する人々の学びの場としても活用されています(図7)。国内外からも注目される活動の一つで、循環型社会のモデルとして、WWOOFシステム(宿泊と食事の提供を受ける代わりに労働し、金銭の授受はしない)を利用した外国人の来訪者も増えているようです。

土遊農がある根上地区は数十軒の民家からなる集落ですが、高齢化によって、便のいい都市部(子ども夫婦に近いなど)への人口流出が続き、そこに住んでいた人々が使用していた家の空き家化と田畑の休耕による荒廃が徐々に進んでいる地域です(図8)。

土遊農ではその課題に対して、土地や空き家を「借用」する形で、機械化による広範囲の水田の利用、インターンの人々の住まいとしての空き家の活用を行っています。『先人の努力の上に今の農地がある。一度手を離す(農の停止)と、自然(森)へ還って行く。そうなってしまったら、すぐには使えない』、その信念のもと、できる限りの維持を心がけているそうです。

最近では近隣の企業が休耕田を借り上げて、米栽培や野菜のハウス栽培を行い、スーパー等へ出荷する事業を行う地域もあるようです(図9)。荒廃の進む集落の田畑の利活用をどのように進めていくのか、地元自治体も悩んでいる中で、非地域住民による活動が注目されています。



図7 土遊農研修生の助っ人達による田植え



図8 土遊農がある根上地区の風景



図9 休耕田に立つ企業のハウス(トマト)

◎終わりに

これまでは地域住人が一丸となって日々の営みの中で地域形成を担い、地域社会の維持・活性化に取り組んできました。しかし、昨今の山村の過疎・高齢化による人手不足の深刻化で住民力が弱まってきた地域では、地域住民の活動だけではその地域社会の維持が難しくなっています。

実際に農山村に入ってみると、70～80代の方が田畑で作業をしている風景を多く目にすることができるといいます。さらに、地方自治体がこれまで細やかな対応を講じてきた支援策も、経済面・人材面から縮小を余儀なくされています。「自治体がやってくれる時代は終わった」そう述べる地域住人も少なくありません。そのような時代の変化の中で、市民が行う非住居地域での支援活動の重要性が増して来ていると実感しています。

次項で紹介する「持続可能性を指向した中山間地域の活性化」のような、地域住人による地域活動の活発化も昨今話題となっている取り組みの一つです。しかし、その活動の要として期待されているのは、交流人口の増加による経済活性化や、オーナー制による田畑の利活用の推進、I・Uターン者の住居としての空き家の利活用など、「非地域住人による他地域資源の利用促進」であるように思います。

国民人口が減少している日本で、数十年後に人が住まない集落が増加するのは避けられない状況ですが、非住居地域をどのように捉え、支えて行くのか、今後の日本を考える大きなテーマではないでしょうか。

最近では、大学が若者の教育機関としてだけでなく、地域住人の学びの場として広く利用され、地域活動の場の一つになってきています。人と人をつなぎ、地域活動を思考・実践する場としての大学の姿が、豊かな地域形成や人材育成につながるのではないかと考えています。

東京学芸大学の多摩川エコモーション、東京農業大学の多摩源流大学、金沢大学の里山里海プロジェクトなど、私の身近にも地域と人材をつなぐ役割としての多様な大学活動の実践があ

ります。大学教育の場において、専門分野の研究という縦方向の探求と、地域社会と連携した横方向の広がりを複合化した教育体系を築き、実践してゆくことは、今後の地域社会の再構を担う中核となるのではないかと期待しています。
(2012年5月)

*本稿は、筆者の博士後期課程在学中に副テーマ論文として研究した「地域活性化における大学と地域の連携—現状と課題—」(2010年8月)の一部を再考し、震災関連の項目を追記し再構成したものです。



持続可能性を指向した中山間地域の活性化

西村 俊

(北陸先端科学技術大学院大学マテリアルサイエンス研究科)

Regional Revitalization Promotion toward the Sustainable Local Community in the Hilly and Mountainous Areas

Shun NISHIMURA

School of Materials Science,

Japan Advanced Institute of Science and Technology (JAIST)

◎はじめに

この数十年の間に都市集中型の社会形成が進む中で、農山漁村からの人口流出が加速し、中山間地域¹⁾の活力が急速に衰えてきている。近年では、限界集落²⁾の増加により、これまで受け継がれてきた土地(山林・田畑)や家の継承だけではなく、その土地に培われてきた文化や自然観の喪失も危ぶまれる状況が続いている。行政課題の効率化を目的とした、過去数回にわたる町村大合併による地域性喪失の懸念についても様々な場所で議論が続けられている。

一方、近年、「山村から都市へ」という流れではなく、「都市から山村へ」と移りゆく人々の動きも徐々に広がりを見せている。友人と

の余暇(キャンプや山登り)や子どもとの農林体験活動だけでなく、援農・林業ボランティア活動、企業や大学のCSR活動、研究調査活動、また食の安全への高まりによる生産者訪問や農業従事活動³⁾にも多くの関心が寄せられている。さらに、U・Iターン⁴⁾のように山村地域へ生活圏を移し、地域の担い手として活躍する定年世代や子育て世代の話題を耳にする機会も増えており、農山漁村への新しい潮流を感じる機会も増しているように思う。

このように、これまでの農山漁村の現状や地域行政政策は、時代とともに刻一刻と変化してきている。ここでは、石川県における中山間地域での“地域活性化”の事例を参考に、現在の課題とその解決に向けた取り組みから今後の持続可能性を思考する上での話題提供を行いたいと思う。

◎石川県白山ろく(白山市)

石川県白山市は、2005年2月に8市町村(松任市、美川町、鶴来町、河内村、吉野谷村、鳥越村、尾口村、白峰村)の合併により誕生した新しい自治体で、海岸部から山間部まで広がっている(図1)。白山ろくは、その中でも白山の麓に位置する河内、吉野谷、鳥越、尾口、白峰の旧5村地域を含む中山間地域を指す。

白山ろくの面積は市全体の約86%(650.48 km²)を占めるが、居住人口は6.15%(6,974人)に過ぎない⁵⁾。地理的には、例えば金沢市内から吉野谷まで車で40分程度の立地にあり通勤



図1 白山市の地理

(白山市 HP より)

圏ではあるが、過疎・少子高齢化が次第に進んでいる⁶⁾。主な産業は、天然資源である白山や温泉などの天然資源及びスキー場を活かした観光であるが、年々入込客数も減少している⁷⁾。これらの特徴は白山ろく地域固有のものではなく、全国各地で同様の状況下におかれた地域は多い。

◎地域再生システム論

内閣府連携講座によるモデル講義として2006年にJAISTで開講され、翌2007年に9地域10大学、2008年には24地域25大学に広まり、地域活性学会(2008年～)の発足に大きく寄与した大学の公開講座。2011年度も各地で開講され、産学官民が一体となり、地域再生への取り組みの議論や提言、地域活動への実践を試みるための連携の場となっている。

石川県白山ろく地域は、本学で2008年度から「中山間地域振興グループ」として活動を開始し、白山ろくの農業や観光に関わる地域住民、行政関係者、本学教職員及び学生とバリエーションに富んだ構成メンバーが集い、多角的な議論や現地視察を進めてきた(図2)。また、石川県内の事例として、能登町【春蘭の里】や羽咋市【神子原地区】の実踏調査も行い、「弱みを強みへ変える」という視点に基づく地域の活性化策の検討を行っている。

◎地域課題を資源と捉えた活用策とその経過

・耕作放棄地、荒廃田対策

定住人口の減少や高齢化に伴い、これまで田



図2 意見交換および視察の様子

畑として利用されてきた土地の管理が行き届かず、雑草が生い茂る荒地化が進んでいる(図3)。「先人の努力の積み重ねにより作られた農地を守らないと直ぐに自然へ還っていき、使用したいときにすぐには使用できなくなる」という危機感はあるが、人手不足で草刈りもできない場所が多い。

その活用策として、白山ろくではウドや山菜の転作作物の栽培と牛の放牧が実践されている。転作作物の栽培では、約0.4haを「木滑山菜園」として収穫体験イベントを実施し(図4)、地域での地産地消作物の利活用の促進を進めている。牛の放牧では7反歩⁸⁾に4～6頭の規模で実施することで、鳥獣害と雑草の軽減に効果を上げている。今後、体験農業活動への利用、焼畑イベントの実施、休耕田を使ったドジョウやモロコの養殖なども検討している。



図3 吉野谷木滑の耕作放棄地にはススキと雑木が群生している。吉野谷の登録耕作地48haのうち、18ha(37.55%)が耕作放棄地である。



図4 ウドの収穫体験イベントの様子

・空き家、空き施設（廃校舎等）対策

過疎化および町村合併による施設の統廃合により、空き家や空き施設の数が増加した。豪雪地帯の白山ろくでは、空き家および高齢者世帯家屋の雪下ろし（図5）も課題であり、雪下ろし・雪掻きの難から都市部へ移転するケースもある。雪対策については、今国会での豪雪地帯対策特別措置法改正案審議が行われており、今後は国や地方自治体が倒壊の恐れのある空き家の除雪を担う手続きが進む予定ではあるが、過疎化進行の大きな要因の一つである。

白山ろくでは、現在Iターン居住者による農家民宿や農家レストランとして、数店舗が開業しており、今後も利用者を募ってゆく予定である。しかし、I・Uターン者への貸し出しは、家屋修繕費や地域住人との信頼関係の構築等、慎重な対応が必要な部分もあり、地域を維持する上でどのように人選をし、新規移住者を得てゆくのが課題である。

この他にも、農業、炭焼き、伝統文化等の研修施設としての利用、廃施設所有資材の地域での新たな利活用、廃校のプールでの養殖、スキー場の夏季観光牧場化等の活用策、また、若者の雇用として雪下ろしを行う仕組み作り等が議論されている。

・鳥獣害対策

山間部では、サル、猪、鹿等による農業被害に悩まされている。鳥獣害被害は、単に農作物の損失だけでなく、特に高齢者の農作業に対す



図5 雪下ろしの風景⁹⁾より

る意欲を削ぎ、離農につながるものが懸念されている。後述の「白山ろくポタン鍋プロジェクト」では、猪肉や鹿肉を地域の恵みとして利用する構想を立て、休耕田に猪捕獲用柵の設置を行い、獣肉加工処理施設作りのための準備を進めている。

・農と観光の連携による活性化策

現在の白山ろくの二大産業である農業と観光の再生を目指した取り組みとして、地域の素材を活かした食ブランドの創設を研究している。「白山百膳」や「白山堅豆腐カレー」の創作・販売のほか、白山にちなんだ「白山もんぶらん」の開発（フランス大使館とのタイアップ=図6）、「白山米粉」の販売、缶詰や山菜漬物の加工場作りなどが手掛けられている。

農業と観光の連携により、交流人口の増加と地元への収益還元のほか、地域住人の生きがいづくりにも貢献している。今後は、伝統的に地域で受け継がれてきた「河内ヘイケカブラ」を用いた郷土食や「仏師ヶ野柿」の特産化が検討されている。

・雇用の確保は課題

自治体の緊急雇用制度による地域雇用の創出には、事業年数や同一者の継続雇用に関する規定があり、せっかく育成されてきた地域の人材を保持できないという課題がある。現状では、一つ一つの事業で収益は出ても人の雇用までにはもう一歩という状況で、白山ろくの現在のプ



図6 白山もんぶらん（白山に隣接する北陸3県の商工会が共同で活動中）

プロジェクト全体の連携により、雇用創出を目指している。白山ろくで行われている観光イベント（白山麓収穫祭、スーパー林道ウォークなど）や各種事業（木滑山菜園など）の中心人物は、60～70代の限られた中心メンバーにより運営されており、負担軽減のためにも更なる人材の確保が求められている。

◎白山ろくポタン鍋プロジェクトとその後

これらの提案は、農林水産省「農山漁村（ふるさと）地域力発掘支援モデル事業」の「白山ろくポタン鍋プロジェクト協議会」（2009年）として支援を受けるに至った。この名称の由来は、猪肉の利用というだけではなく、大豆栽培から豆腐や味噌作り、農業体験で育てた野菜や山菜の収穫物の利用、ブランド米やスイーツ作り、どぶろく作りなど、それぞれの活動を連携して行くことで、生産、加工、流通、消費を通じて、白山ろく全体で同じ「ポタン鍋」の材料を一つ一つ磨いて活性化を進めていこうという思いが込められている（図7）。

現在は、隣接県との広域連携の取り組みも含め、「環白山」の活性化に向けた地域の活性化へと展開している。

◎石川県内での地域活性化事例紹介

行政主導の地域活性化から、地域住民主導の活性化への取り組みとして、石川県内では他に

も、能登町春蘭の里（平成20年度立ち上がる農山漁村に選定）、羽咋市御子原地区（毎日・地方自治大賞特別賞）、加賀市バイオマスタウン構想（平成19年度内閣府特命担当大臣賞）などがある。

◎おわりに

「日本の原風景を保全したい」という思いだけでは、地域を支えるだけの雇用（地域経済の確保）や伝統智を守れない時代です。国や地方行政の対応に限界がある中で、それぞれの地域を守るためにどのような対策が試みられているのか、その一例として、白山ろくポタン鍋プロジェクトの活動を紹介させていただきました。伝統智の維持と継承のために、地域がどのような状況下で智恵を絞って支えているのかを考えるきっかけになってくれたらと思っています。

現在、東日本大震災や米軍再編で原発関連施設、米軍基地、自衛隊駐屯地等の誘致にかかる地元への経済効果がクローズアップされる中で、それを問題視するだけでなく、地方自治体の活性化策という側面も捉えた総合的な議論が必要な時ではないかと思っています。

十数年来、日本の一次産業従事者の高齢化や農山漁村の疲弊が叫ばれる中、今もなおそれぞれの地域の苦悩が続いています。「農山漁村から都市に呼びかける」方向だけではなく、「都市から農山漁村とのつながりの重要性に気づ



図7 ポタン鍋プロジェクトの連携

く」方向の更なる広がりを期待しています。

石川県では現在、3年後の北陸新幹線の開業に向け、架線工事とともに石川県全域への客足の導線作りを進めています。東京と金沢をおよそ2時間半で結び、石川県の試算では121億円の経済効果が見込まれているようです。石川観光の際は、ぜひ白山ろくの活動も肌で感じてみてください。

なお、市町村合併が行われた地域での伝統的な栽培品種の継承とその栽培に関する調査については、また追って報告を行いたいと考えています。
(2012年3月)

(謝辞)

本稿は、筆者の博士後期課程在学中に副テーマ論文として研究した「地域活性化における大学と地域の連携—現状と課題—」(2010年8月)の一部を再考したものです。白山ろくボタン鍋プロジェクト協議会(2009)ならびに本学地域再生システム論「中山間地域振興グループ」(2008～)の関係者の方々に深く感謝申し上げます¹⁰⁾。

関連文献及び注釈

- 1) 平野の縁から山間部にある地域を指し、日本の国土のおよそ70%を占めている。
- 2) 集落に住む人口の50%以上が65歳以上の高齢者である集落。
- 3) 例えば、ノギヤルプロジェクトなど。
- 4) Uターン；農山漁村から大都市に移り住んだ人が自分の生まれ育った故郷に戻って働くこと。Iターン；生まれ育った故郷以外の農山漁村に移り住み働くこと。
- 5) 白山市市民課(2010年12月31日)。
- 6) 1990年から2010年の20年間で、1,588人、99世帯の減少であり、一方、都市部の松任、美川、鶴来地域が増加傾向を示している。白山ろくの高齢人口は2010年の試算では35.5%。
- 7) 2005年から2010年の5年間に、白山ろく地域の観光入込客数は296,000人減少。
- 8) 1反歩(たんぶ)は300坪(約1000m²)。
- 9) 「白山ろく地域活性化計画」白山市(2012年2月)。
- 10) 活動経過の参考資料としては、中部圏研究調査季報第169号特別寄稿「能登・春蘭の里と白山ろくに見る中山間地再生」堀田哲弘(2009年12月)や、社会イノベーション・シリーズ2「白山ぼたん鍋プロジェクト」北陸先端大(2009年6月)、白山の恵みHP等をご参照いただけたらと思います。



ムギとイネの藁利用について

— 東京都東久留米市・小平市の事例 —

川上 香（江戸東京たてもの園）

Utilization of wheat and rice straw - Cases study in Higashi-Kurume City and Kodaira City, Tokyo

Kaori KAWAKAMI

Edo-Tokyo Open Air Architectural Museum

1. 背景

2012年1月から2月にかけて、自らが所属する「江戸東京たてもの園」での調査（小麦と武蔵野のくらし展の開催準備）過程において、2のインフォーマントの聞き取りと耕作地の観察から副次的に得られたムギとイネの藁利用についてまとめる。

2. インフォーマントについて

A 東京都東久留米市在住、男性、70代、農業従事。
B 東京都小平市在住、男性、60代、農業従事。

3. ムギとイネの藁利用について

(1) はじめに

インフォーマントAとBが耕作を行う東久留米市と小平市は、武蔵野台地の中央部に位置する。武蔵野台地は東京都青梅市から東に向かって広がる扇状地で、北を荒川、南を多摩川に挟まれた小高い台地である。台地を流れる川は枝状の小規模なもので、台地の周縁部や川沿いのみに水田が見られ、農業の中心は畑作であった。

江戸時代の小平市小川村の様子を記した村明細帳（1821年・文政4）には、作物は「岡稲・大麦・小麦・粟・稗・蕎麦・荳・辛子・菜・大根・大豆・小豆・芋」と記されており、古くからムギと雑穀栽培を行ってきた地域であることがわかる（『小平市史料集』1993年）。

江戸時代後期からサツマイモや陸稲が耕作され、明治時代から大正時代には、養蚕が盛んになり、蚕とクワ苗で現金収入を得ていた。大正

時代頃から、関東大震災の影響や鉄道網の発達により都市民が流入し、宅地化が著しく進んだ。現在、専業農家数は両市をあわせて165軒ほどである（東京都統計局2005年）。

インフォーマントAは、現在、果樹を中心とした農業を営んでいる。昭和30年代頃までは、畑でコムギ・オオムギ・イネ（ウルチイネ・モチイネ）・サツマイモ・野菜類を栽培していた。インフォーマントBは、現在、野菜を中心とした農業を営んでおり、コムギの栽培経験がある。1町歩ほどの耕作地があり、サツマイモや野菜を市場で販売し、オオムギとイネ（ウルチイネ・モチイネ）は自家用に栽培している。両者とも水田はなく、イネはすべて陸稲である。

(2) ムギとイネの藁利用について

『モチの文化誌』（阪本寧男・1989年）で、正月の注連飾りがモチイネを専らに用いたものであることが報告されている。インフォーマントAとBにムギとイネの藁利用について、その用途が分かっているかどうか聞き取りを行った。その内容は表1のとおりである。

① サツマイモへの利用

ムギが収穫された後、畑で広く作付けされるのはサツマイモとイネ（陸稲）であった。しかし、陸稲は夏の日照りに弱いため、収穫が天候に左右されにくく、市場にも出せるサツマイモの作付けがイネより多かった。このため、サツマイモのツル苗を作る温床、サツマイモ床が多く作られていた。



表1 ムギとイネの藁の用途

	コムギ藁	オオムギ藁	イネ（ウルチイネ）藁	イネ（モチイネ）藁
A	農業資材 肥料	肥料	屋敷の風除け資材 農業資材 肥料	結束材 肥料
B	肥料	農業資材 肥料	屋敷の風除け資材 農業資材 肥料	屋敷の風除け資材 農業資材 肥料

コムギ藁やイネ藁で四角い囲いを作り、中に落ち葉やヌカなどを入れて発酵させ、その熱でサツマイモの芽出しを行う（図1）。3月下旬にイモを並べ、5月初旬にツルを刈り取り、苗とする。Aは昭和30年代まで、Bは現在でもサツマ床を作っている。

AもBも、発酵熱で出る水分をほどよく逃がし、かつ、サツマイモの保温材として利用したのがコムギの籾殻であった。Bはコムギを利用していたが、周囲が宅地化され、畑の風通しが悪く、また、風が吹いても宅地を通過して強風となるため、コムギがなぎ倒されることもあり、コムギ栽培を行えなくなった。現在はコムギに比べ、倒れにくいオオムギを栽培し、その稈を細かく粉碎して、コムギの籾殻のかわりにサツマイモにふりかけ、保温材としている。

②肥料

AとBは両者とも、コムギ藁は太く固く、オオムギ藁はコムギに比べやわらかいと認識している。コムギもオオムギも収穫後の切り株はそのまま畑に残し、分解させて肥料とするが、オオムギ藁の方がやわらかく分解が早いと考えている。オオムギ藁は、ほとんど肥料とした。

③屋敷の風除け

AもBも、ウルチイネ藁を屋敷の風除けにしたという（図2）。作物が畑からなくなる冬は、風を遮るものがなく、寒さと風で舞い上がる土から屋敷を守る風除けが必要であった。

Bは、モチイネ藁も風除けにした。Bの家では、ウルチイネよりモチイネの方が作付けが多いので、広い範囲にわたる屋敷の風除けにモチイネも利用した。Bは、風除けとしたウルチイ

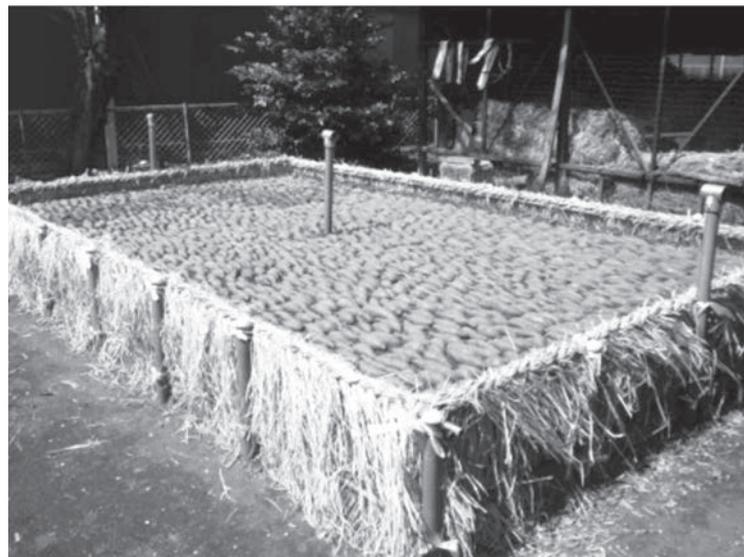


図1 サツマ床（2012年撮影）



ネ藁をサツマ床のオオムギ藁の上に均等に敷いて、オオムギ藁と同様にサツマイモの保温材としている。

Aは、かつて2 mほどの高さの竹組みを家の北側の垣根に這わせ、ウルチイネ藁をかけて風除けとした。この風除けが必要なくなる4、5月には、植えつけたサツマイモの苗と苗の間に、風除けに用いたウルチイネ藁を長い稈のまま置いた。サツマイモが肥大化する頃に苗間のウルチイネが土中で分解され、サツマイモの肥料となるという。Aは、昭和30年代頃までのウルチイネ藁は現在のウルチイネ藁にくらべ、長くやわらかかったと記憶している。

④結束材

Aは、冬の間、モチイネ藁を何本かつなげ、ひも状のものを何百本と作り、ムギの収穫時、束ねたムギを結束するために利用した。ムギの脱穀時に解きやすく作業がしやすいよう、モチイネ藁の両端をくるくる巻いてムギ束に挟み込んで結束した。

⑤サツマ床利用以外の農業資材

Aは、地這いのキュウリやスイカなどを栽培する際、コムギ藁を苗の周りに敷いて栽培した。コムギ藁は分解しにくいので、長期間にわたって土の表面に届く陽を遮り、雑草の制御に役立

ち、かつ土中の保水が行える。

また作物のツルがコムギ藁をしっかりとつかんで成長していくので、特にスイカなどは風が吹いても転がりにくく、傷がつかないなどの利点があった。

(3) おわりに

「落ち葉一枚無駄にしない」という、かつての農業慣習の中で、ムギとイネの藁は、気候や栽培作物に即した利用が行われていた。また藁の固さなどによって適材適所に利用する智慧があった。一部の農家では現在でもムギやイネの栽培と、稈の利用が継承されていることを確認することができた。



図2 Bの屋敷の風除け (2012年撮影)

菜っぱのこと、種子のこと

和田 千代（環境教育研究センター）

About leaves and about seeds

Chiyo WADA

Field Studies Institute for Environmental Education

◎おいしい冬の菜っぱ

昨秋、長野県の野沢温泉村を訪ねたとき、温泉街のあちこちにある土産屋の店先に野沢菜の種子が並んでいるのを見つけました。小さな種子袋には、ずんぐりとしたカブが描かれていて「信州野沢温泉場名産 蕪種」とあります(図1)。

幼少の頃に読んだ「おおきなカブ」というロシア民話の絵本に、こんな横スジのある逞しいカブがでてきたことを思い出して懐かしくなりました。もう1970年頃のことですから、今の絵本には、今どきの丸くてつるんとしたカブが登場しているのかもしれない。

野沢菜に話を戻します。野沢菜の発祥は野沢温泉村の健命寺にあります。健命寺の口伝によると、宝暦年間(1751～1763年)、当寺の八世晃天園瑞和尚が京都遊学のおり、関西周辺で栽培されていた「天王寺カブ」の種子を持ち帰り、栽培したことが始まりとされています。

天王寺カブと野沢菜の関連性には諸説あるものの、以来250年にわたって採種と栽培が繰り返され、現在も寺の境内つづきにある1000平方メートルほどの畑で採種が続けられています。私が訪れたときには、なだらかな斜面の畑に、まだ小さい野沢菜が一面に育っていました。

健命寺で採られた種子は「寺種子(てらだね)」 「原種」と呼ばれて、一部は市場に流通しています。カブが属するアブラナ科の植物は交雑しやすいためか、私が土産屋で見つけた種子にも村内の採取地がきちんと記されていました。

野沢菜がカブの仲間だということを意外に思うかもしれませんが、カブはもともと根も葉もおいしいのが特徴で、葉は「冬の菜っぱ」「つけ菜」として親しまれ、日本各地にたくさんの在来品種があります。

たとえば、野沢菜のルーツと目されている「天王寺カブ」は大阪天王寺で古くから栽培されて



きた品種で、葉は野沢菜のように大型で濃い緑色をしています。

また関西地方で「すぐき」と呼ばれ珍重されている京都名産の漬物は、「賀茂酸茎菜（かもすぐきな）」というカブを塩漬けしたあと乳酸発酵させたものです。これは江戸時代から京都賀茂で栽培されてきました。

京都松ヶ崎には「松ヶ崎浮菜カブ」があり、これは近江カブと水菜が交配して生まれたといわれます。水菜に似た葉を一株にどっさり茂らせるので、とても食べがいがあります。在来品種の菜っぱには旨味があり、そのおいしさは市場に出回っているカブからはちょっと想像がたいものです。

長い年月をかけて日本の風土に育まれた在来品種のカブたちは今、わずかな品種だけが地域の特産品として知られているほかは、市場から半ば見捨てられたようになっていきます。そしてカブに限らず在来品種の野菜は、種子が売れないために採種農家の多くが種採りをやめてしまい、日本とは風土の異なる海外で採種されているものも少なくありません。

◎岩崎政利さんの野菜

私が在来品種の良さを知ったのは、岩崎政利さんの野菜がきっかけでした。岩崎さんは長崎県雲仙市で「種の自然農園」を営み、自家採種

をつづけている農家です。岩崎さんが育てているのは先代から受け継いだ野菜や、全国各地で自家採種された在来品種で、その数は80品種以上になります。

木俣美樹男先生が農園（教材植物園）のガラス室で種子から栽培された、岩崎さんの野菜を目にしたとき（それは10種類ほどありましたが）、その個性的な姿と「しゃくし菜」「かつお菜」「大和真菜（やまとまな）」といった親しみのある名前に見入ってしまいました。

岩崎さんの野菜には、ハリハリとした生命力があります。そして、どの野菜にも「血統」とでもいうべき品格を感じます。じっと見ていると、まるで野菜たちが肩を並べて笑っているような気さえしてくるのです。私はこれほど雄弁に語る野菜を見たことがなく、種子が持つ力と、種子を採りつづけることの意味を知りました。

自家採種について岩崎さんは、著書の中でこう書いています。

「私の場合は、（タネを採る株は）できるだけ肥料のないところ、畑のふちなどを選んで植えている。無肥料の土で育ったものから採れるタネのほうが、生命力が強いと感じているからだ」

「自分でタネを採っていく良さは、自分の畑に野菜が合ってくることにある。その土地の土と自然環境から育った親から生まれた子どもは、その土地にふさわしいなにかを身につけていくようだ。タネ採りをつづけると、しだいに作りやすくなってくる」

「自分の畑に野菜が合ってくる」とは、「畑を耕し育てる人に、野菜がなじむ」という意味でもあります。つまり種子は、岩崎さんを記憶しているといえるのではないのでしょうか。そして種を採り守り継がれた在来品種の種子には、植物と人の遙か昔からの記憶が刻まれていることを思うとき、私はそれをほんとうに美しいと感じるのです。

注：写真は健命寺ご住職の許可を得て転載した。『漬け物王国日本を代表する野沢菜』『作物の多様性を守る人々』『つくる、たべる、昔野菜』を参照した。



図2 健命寺でいただいた野沢菜のチラシ

イヌガラシ属数種の種および種内分化

伊藤 惇
(東京学芸大学環境教育研究センター)

Inter- and Intra-specific differentiation of several species of genus *Rorippa*

Atsushi ITO
Field Studies Institute for Environmental Education

自然を構成する要素として、植物は最も重要な要素の一つである。その中でも、日常生活環境において最も身近な植物は雑草である。雑草は人間の攪乱した環境に適応するために、様々な形態・生態的変異を示している。そのため人間が住む環境を知るのに、雑草はよい学習教材となる。

本研究では、アブラナ科イヌガラシ属の雑草の生活史戦略について比較研究を行った。次のことを研究目的とした。

一つ目にイヌガラシ、スカシタゴボウと自然雑種ヒメイヌガラシについて、生態調査、イヌガラシとスカシタゴボウの人為雑種第1代F₁を含む2種2雑種と雑種第2代F₂の形態的調査、染色体観察とDNA断片長多型 AFLP法を用いて種間関係を明らかにする。

二つ目に外来種キレハイヌガラシが日本における分布を広げているので、採集地ごとにその形態を比較し、分子生物学的手法である AFLP法を用いて、どのような種内分化をしているか明らかにする。

生態的調査の結果、自然雑種ヒメイヌガラシはイヌガラシとスカシタゴボウが同所的に生育している所に多く見られた。

形態的調査の結果、自然雑種ヒメイヌガラシと人為雑種F₁はともに、花器においてイヌガラシとスカシタゴボウの中間的な形質を示し、また、両雑種は近似していた。形態的な形質7項目による多変量解析においては、イヌガラシ、スカシタゴボウ、自然雑種ヒメイヌガラシと人

為雑種F₁の3つのクラスターに分類された。

染色体観察の結果、自然雑種ヒメイヌガラシと人為雑種F₁はともに2n=24(3x)であり、不稔性であった。AFLP法による結果は、イヌガラシ、スカシタゴボウ、自然雑種ヒメイヌガラシと人為雑種F₁は3つのクラスターを形成した。雑種第2代F₂は、生殖成長した6個体の中の3個体は自然雑種ヒメイヌガラシと非常によく似た形態を示した。

キレハイヌガラシは、海外を含む9産地の根出葉の形態を比較した。その結果、葉の面積や鋸歯の深さなどの点で明確な差異が認められた。AFLP法の結果では、長野県茅野市産、東京都八王子産とその他の地域産の3つのクラスターに分類できた。

以上の点から、自然雑種ヒメイヌガラシはイヌガラシとスカシタゴボウの種間雑種であることが明らかになった。また、キレハイヌガラシの種内分化の様態が明らかになった。



サマイのインド亜大陸伝播

——形態的形質とDNA多型による種内分化——

大塚 啓太

(東京学芸大学環境教育研究センター)

Dispersal of *Panicum sumatrense* in Indian subcontinent
- Intra-specific differentiation of morphological traits and amplified fragment length polymorphism of DNA

Keita OTSUKA, Field Studies Institute for Environmental Education

はじめに

植物は、自然環境の中でも重要な要素であり、私たちの生活にも深く結び付いている。その利用については、食料のほか、住居、衣類というように多岐にわたっており、私たちの生活には欠かせないものといつて良いだろう。そして、こうした重要性をもつ植物がどのようにして現存するようなかたちにまで広がっていったのか、どのように形態を変えていったのかについても大きな関心事の一つといえる。その中で食料として利用され、生活の糧となるもの一つである雑穀に焦点をあてた。

ユーラシア大陸の全域に古くから広がる栽培植物である雑穀の中で、インド亜大陸に古くから広がるイネ科キビ亜科に属するサマイ (*Panicum sumatrense*) を取り上げ、その起源と伝播について検討する。

本研究では、サマイの栽培試験を行うことで、栽培化に伴う人為選択を受けやすい形態的形質の比較を行う。また、直接的な人為選択を受けにくく、自然淘汰の影響の手掛かりとなるDNA断片長多型の解析により、種内分化の様

態を明らかにすることを目的とした。

研究材料と方法

サマイはキビと同属の植物で、穂の形態がよく似ているインド原産の雑穀 (図1) で、現在、インド、スリランカ、ネパール及びビルマに広く栽培されており、中でも非常に貧弱な土壌においてもよく育つとされている (阪本 1988)。

表1のように収集された38系統のサマイを用いて形態的形質調査及び、AFLP (Amplified Fragment Length Polymorphism) 分析法を行った。形態的形質調査は、出穂した個体を確認した後、その時の植物体の形態的特性を調査した。AFLP法では、幼苗の全核DNAを抽出した。制限酵素はEcoRI、MseIを、プライマーはEcoRI+AGC/MseI+CTG、EcoRI+AGC/MseI+CAG、EcoRI+AGG/MseI+CTG、EcoRI+ACA/MseI+CAGの4組を用いた。

結果と考察

形態調査では28系統、AFLP解析法では33系統において差異・変異の種内比較を行うことができた。これにより2つの系統樹を作成することができ、表2・3のような系統群への分類や遺伝的に近縁な系統を示すことができた。これらと表1のサマイの供試材料収集地との比較により、伝播経路を見出すことができた。

伝播経路は、インド亜大陸の北東部から南下するように大陸全体に拡がっていったと推定でき、同属のキビに関しての研究結果 (木保 1993) と同様の結果が得られた。



図1 サマイ

表 1 供試材料の収集地

カルナータカ州	PS01 ~ PS09(9 系統)
タミル・ナドゥ州	PS10 ~ PS17(8 系統)
マハラシュトラ州	PS18 ~ PS24(7 系統)
オリッサ州	PS25 ~ PS29(5 系統)
ビハール州	PS30 ~ PS35(6 系統)
アンドラ・プラディシュ州	PS36 ~ PS38(3 系統)

表 2 形態調査による系統群分類

A	PS04、PS23、PS28、PS31、PS32
B	PS09、PS20、PS27
C	PS02、PS10、PS17、PS18
D	PS07、PS11、PS12、PS13、PS15、PS16
E	PS06、PS14、PS25、PS36、PS37、PS38
F	PS29、PS30、PS33、PS35

表 3 AFLP 分析による近縁な系統群

①	PS03、PS23、PS25、PS27、PS28、PS29、PS30、PS31、 PS32、PS33、PS34、PS35、PS36
②	PS11、PS14、PS15、PS16、PS17、PS18、PS19、PS20、 PS20、PS21、PS22、PS37、PS38
③	PS04、PS07、PS08、PS09、PS10、PS12



キャンパスの自然的環境の評価

——「学芸の森」の実態調査から——

齊藤 嵩之

(東京学芸大学環境教育研究センター)

Evaluation of natural environment of university campus
- based on a questionnaire to survey “Gakugeinomori” forest

Takayuki SAITO

Field Studies Institute for Environmental Education

本研究は東京学芸大学の自然的環境に着目し、大学で活動する様々な属性の人々が、キャンパスの自然的環境をどのように捉えているのか明らかにしようとするものである。

東京学芸大学のキャンパスはその豊かな自然的環境から「学芸の森」の愛称があり、大学のキャンパスとしては珍しい。しかし、これまでに自然的環境に関する全学的な調査は行われておらず、大学の構成員がどのように捉えているのかは不明である。

本研究ではこのようなキャンパスの自然的環境に着目し、自然が構成員にとってどのように捉えられ、機能しているのか検証を行った。また「学芸の森」は名前が先行し、活動や認知の現状などの実態が不鮮明である。「学芸の森」が構成員にどのように認識されているのかも検証した。

本研究は質問紙を用いて行った。結果、810

名から回答を得た。属性は、大学院生を含めた学生が46.8%、教員が21.1%、職員が25.6%、地域住民が6.5%となった。

調査の結果、キャンパスの自然的環境の印象として「心地良い」が52.3%、「落ち着く」が51.5%となり、安らげる印象を持つ言葉が構成員の半分以上から選ばれた(図1)。これは森が持つ印象と合致する。

また、自然的環境については「好き」や「良い」とする好感的な評価がされていることが明らかとなった(図2)。理想的な自然的環境については、学生に比べ教員、職員、地域住民から理想的であるとされた。教員、職員が大学での勤続年数が長いことや、他の大学のキャンパスを知っていることを考慮すると、学生の評価よりも現実的であると言える。

「学芸の森」については「名前は聞いたこと

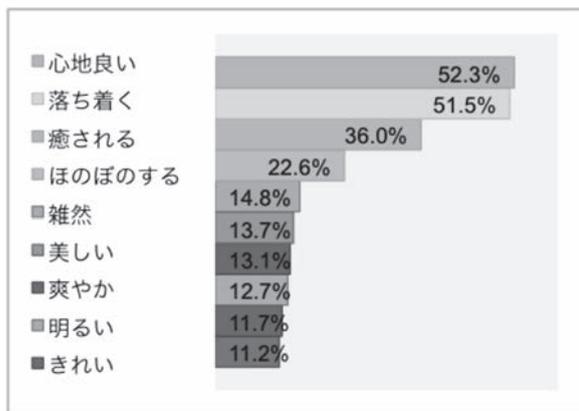


図1 キャンパスの自然に対する印象を選んでください(複数選択可)。

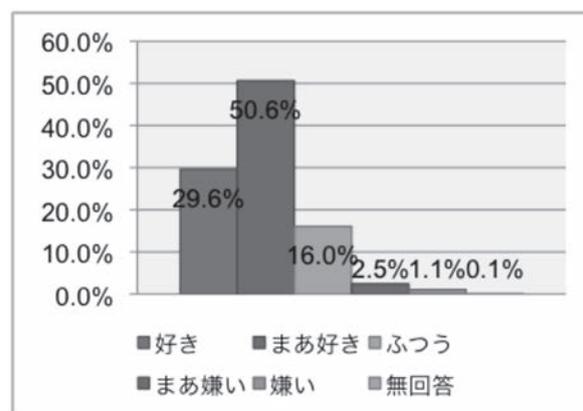


図2 キャンパスの環境は好きですか。

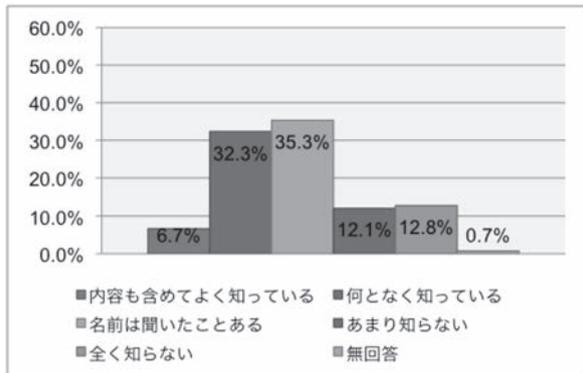


図3 「学芸の森」が何か知っていますか。

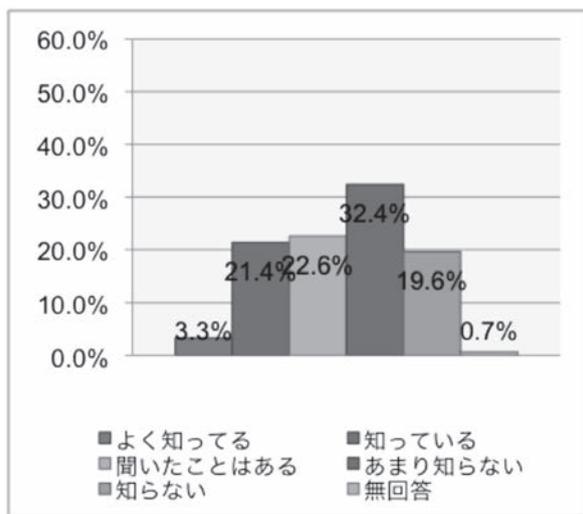


図4 「学芸の森」を良くするために、教職員、学生、地域住民と一緒に活動していることを知っていますか。

がある」が最も高く、活動に関しては「あまり知らない」が最も高い回答となった（図3、4）。キャンパスの自然的環境が好感的に評価され、自然が必要なものとして機能しているのに対し、「学芸の森」は知られていない現状が明らかとなった。しかし「学芸の森」の名前については、知らない人も「好き」や「適切」と考えていることが明らかとなった。

調査結果より、今後は「学芸の森」を共通認識として共有することが求められる。これまでのキャンパスの自然的環境としていた認識を「学芸の森」として集約し、共通認識を持って構成員一体の活動を行うことが必要である。

「学芸の森」とはなんだろうか？

木俣 美樹男
(東京学芸大学環境教育研究センター)

What is “Gakugeinomori” forest?

Mikio KIMATA
Field Studies Institute for Environmental Education

東京学芸大学のキャンパスを「学芸の森」と呼び、学芸の森プロジェクトが活動を始めてから、学芸の森環境機構、芸術館学芸の森ホール、学芸の森保育園などのように「学芸の森」が冠せられるようになった。

このように東京学芸大学を象徴し、個性づけるようになってきた「学芸の森」とは何だろう。キャンパスの自然的な環境を称した概念か

ら、次第に文化的な事物・事象を含みこむようになってきているようだ。

多くの大木が豊かに茂っている学芸の森はキャンパスを涼やかにしているばかりではなく、生物多様性が豊かで、絶滅危惧種に加えられている動植物を数種も育てている。

昨年、愛知県で開催された生物多様性条約締約国会議 COP10 で、日本政府が提案して採択



図1 椎の森の整備の過程：暗いごみの森



図2 椎の森の整備の過程：演劇部の廃材



図3 椎の森の整備の過程：整備後に植えたホタルブクロ



図4 椎の森の整備の過程：明るく見通せるようになった森

された「生物多様性の10年」が始まる。気候変動やピーク・オイルに比べて、生物多様性はなかなか難しい生物学的な概念であるので、市民に広く普及してはいない。

野生生物と栽培植物・家畜、絶滅危惧から経済利用の利益分配まで幅広い内容と解決困難な課題を含んでいるので、「広報、教育、普及啓発CEPA」の重要さが求められている。学芸の森には動植物を採集し、または、放散に来る人が絶えないので、残念ながら生息情報は公開できない。

本年はとりわけ「国際森林年」でもあったので、「学芸の森」の中でも特に懸案の場所であった学生サークル棟西北の常緑樹林の再生活動を一般共通科目『学校園の基礎と展開』受講生とともに実施した。朽ちかけた木を除伐して、茂みの中にうち捨てられていた建築廃材と演劇部漠のごみを片付けて、林下に林床植物を植え、枝打ちチップを敷いた小道を造り、テニスコートが見通せるようにした(図1~4)。

環境教育研究センター彩色園の野菜や果樹は適当な収穫期を待ち、講義で使用する予定を立てていると、いつの間にか根こそぎ盗難にあう。タケノコは盗掘され、竹林の維持すら困難になってきた。研究素材の植物も盗難にあったこともある。大学は社会的な敬意を得て、信頼関係の上に教育研究活動がなされてきた。ところがこの10余年は目に余り、教育研究に障害があるほど、いろいろなものが盗難にあうようになった。盗掘現場で注意をすると、税金を払っているのに、国立大学のものは勝手に盗っても良いのだと開き直られる。

また、東日本大地震後、計画停電が実施され、節電が強く求められたので、環境教育研究センターでは世界中の農家から分譲を受けた貴重な雑穀類の種子保存が困難となり、イギリスの王立キュー植物園のミレニアム・シード・バンクに7350系統を寄贈した。



社会的共通資本としての森とむらの再生・活性化に関する提言 ～森林文化社会の再構築～

財団法人・森とむらの会

Proposals for the rebirth and activation of forest and village as a social commons – Restructure of forest cultural society

Forest and Village Foundation

「財団法人 森とむらの会」の創立会長であった高木文雄は、自然文化誌研究会の元会長でもありました。森とむらの会は30年近く、日本政府などに大所高所から政策提言活動をしてきましたが先年、解散することになりました。

自然文化誌研究会の前会長であった木俣美樹男は高木元会長の行政学の内弟子であり、森とむらの会の理事であったので、その志を継承しようと考えています。

植物と人々の博物館友の会の会員や市民の皆様はその提言を広く共有していただくために、森とむらの会の承認のもとに、ホームページで公表するとともに、下記にも再録することにします。今後とも、著者は森とむらの伝統的な知恵を継承し、環境保全、創造、学習のために、森とむらのために働きたいと任意の活動を続ける所存です。
(文=木俣美樹男)

提言

社会的共通資本としての森とむらの再生・活性化に関する提言 ～森林文化社会の再構築～

(財) 森とむらの会は、およそ30年に亘って森林、林業、山村等の問題について調査研究し、提言を行う等積極的な活動を行ってきた。この間、林業生産活動の低迷等により、山村の過疎化が一層進展するとともに、手入れの行き届かない放置林が累増し、森林の荒廃が顕著になった。

一方では、地球環境問題等から森林の重要性が再認識されるとともに、人工林の成熟化に伴って国産材利用の気運が高まっており、今こそ、改めて森林、林業、山村の今後のあり方を総体的に考えることが必要になっている。

このような中、2011年3月11日に起きた未曾有の東日本大震災は、技術の限界性を顕在化させ、効率化社会からリスク分散型社会への転換の必要性を認識させるとともに、真の持続可

能な社会とは何かを問いかけている。

以上のことを踏まえ、(財) 森とむらの会では、その活動を終わるに当たり、社会的共通資本としての森とむらに関する調査研究委員会を設け、“社会的共通資本”に視点を置き、これまでの活動成果を総括し、今後の森林、林業、山村のあり方について取りまとめたので、下記のとおり提言する。

提言が、それぞれの関係者に真摯に受け止められ、これからの新たな展開の一助となることを期待する。

【 記 】

◆基本的考え方

日本人は、これまで森林の持つ特性を活かし、



森林を荒廃させずに利用し続ける文化を形成し、日常生活はもとより、その神髄を芸術や信仰等の領域まで深めてきた。

しかし、経済効率性の過度な追求のもと展開されてきたグローバル社会の中で、我が国の森林は荒廃し、精神性まで高められた森林と人とのつながりは希薄化し、日本人の生活は、自然との関係性やその中で育まれてきた豊かな文化性を失ってきた。

従って、持続可能な社会の構築やそこで営まれるべき心満ち足りた人間的な生活のためには、多様な価値を有する森林の重要性を再認識し、森とむら、社会の基礎を構成するいわば社会的共通資本として捉え、その視点から、森林、林業、山村等のあり方を総体的に見直し、森林と山村を活性化し、新しい森林文化社会を再構築することが必要である。

この場合、以下に掲げる各項目を個別に実現するだけでは十分ではなく、地域の実情に即応して森とむらの社会的共通資本としての価値を高めるため、総合的な計画の下にソフト、ハードを含め各種の活動が有機的に組み合わせられ、相乗的な効果を発揮するよう関係者が努力することが必要である。

1 多様な森林の維持造成

森林の多様な価値は、災害の危険、動植物の生息、風致の保護等森林そのものと、置かれた場所等によって異なっており、それぞれの森林ごとにその価値の発揮に見合った多様性を確保していかなければならない。この場合、従来よりも長伐期化したり、非皆伐化したりしていくことが必要である。

このため、多様な森づくりが可能となるよう、助成の充実、運用の弾力化とともに、相続税等の特例的取り扱い等、これまでの制度の点検と見直しを行うことが必要である。

2 住民参加型森林計画の作成

森林と人との関係を見直し、多様な森林整備をきめ細やかに進めていくためには、森林所有者等が、自らの住む地区の森林をどのようにし

ていくかを考えるとともに、森林計画の作成に積極的に参加できることが必要である。

このため、住民が参加しうる範囲で、住民が主体となって自律的に作る森林計画（地区森林計画）を森林計画制度の中に位置づけ、推進することが必要である。このことは、現在の制度においても、森林経営計画として認定することにより対応しうる可能性がある。

3 森林管理を効率的に行いうる基盤の構築

「森林・林業再生プラン」では、小規模分散的な森林所有構造に対し、森林の経営、管理を効率的に行いうるよう森林施業の集約化、団地化が推進されようとしているが、所有の現状等からその進展が危惧されるとともに、実行ごとの同意取り付けや結果の所有者別精算等、実際の運営は所有者に応じて複雑に対応せざるを得ない。

このため、集約化、団地化をより効果的に進めるため、その進捗状況を勘案しつつも、所有権の交換、分合、買取（公有林化）等区画整理的手法を導入する「(仮称)林地区画制度」の制度化を行うことが必要である。また、森林の管理・経営の基盤の構築として路網の整備が重要であることから、その一層の推進を図ることが必要である。

4 多様な資源の有効活用とクラスター型（房方）産業構造の育成

山村は多様な資源に恵まれているが、規模が小さく、大量、かつ、均一商品が求められる現在の流通形態では、商品化が困難なものが多い。また、木材からは製材のほか、端材はチップに、樹皮はバークに、葉や樹液さえ芳香剤等に利用される等、多種の商品が関連して生産される。

このため、商品化に当たっては、資源の特徴を活かすとともに、それらの組み合わせや関連性に配慮することにより、山村ならではの商品化を図ることが必要である。

さらには、いわばクラスター型といえる産業構造とその広がりを作り出すとともに、この具体化に当たっては、新しいアイデアや行動力、



経営センスがある NPO や都市住民等も巻き込んだ多様な主体の取り組みを推進することが必要である。

5 地域内資源活用型山村生活の推奨

地域資源の産業化に当たっては、需要者として都市住民が想定されるが、まず、山村自体が地域資源を有効に活用することが必要である。例えば、木造りの街並みや地場の名物料理等は山村らしさや住民の愛着の醸成になるとともに、都市住民へのアピールにもつながる。これまでは都市生活の利便性等を取り入れることが課題だったが、今後は利便性等を求めつつも、地域の資源や魅力を認識し、それを活かしていくことを併せ都市と異なる山村なりの生活を発展させていく必要がある。

このため、地域を総点検するとともに、住民参加のもと、行動計画を具体化することが必要である。

6 自立型・自給型社会の構築

山村のこれからの展開に当たっては、できるだけ都市に依存する形ではなく、山村で自立、自給するという形で検討することが重要である。そのことが、地域の資源等の見直しや掘り起こしにつながるし、また、そのことを意識化しないと、山村自体が都市に埋没する怖れがある。

例えば、木材供給については、需要の大型化において量のまとまりと安定化が求められているが、一方では、そのことにより地場需要を中心とする山村の中小製材工場の材の手当てができなくなる可能性があり、山村において、供給側をとりまとめ、大規模工場と対峙し、大規模工場と地元の工場への供給を調整できるコーディネーターが必要になる。

また、エネルギーについては、バイオマスや小水力、太陽光等を組み合わせれば自給できる可能性があり、必ずしも既存電力会社の大規模発電に依存する必要はない。これらのエネルギーは、中小規模需要に向いており、また、山村が低炭素社会、循環型社会のパイオニア的意

味を持つ。

以上のような活動を円滑に進めるためには、特区制度を始め、それぞれの活動に応じた必要な制度的枠組みを作ることが必要である。

7 山村ワークシェアリング

林業では雇用労働化、単一業務就労化の傾向を強めている。一方、山村では、山菜の採取や農業等、多様な仕事をこなすことが必要であるとともに、そのことが山村に住む醍醐味にもなっている。これらの仕事は断続的で規模は小さく、収入としては安定せず、かつ、自家用に留まる仕事も少なくない。

このため、雇用労働と山村らしい多様な仕事とを調整し、全体として生計費を確保するよう、就労形態を弾力化する山村ワークシェアリングを実施することが必要である。そのことに伴う雇用制度や社会保険制度等において、不利な取り扱いがないように配慮すべきである。

8 山村まるごと環境文化大学化と都市住民の参加

山村の社会と自然環境には、持続可能な未来につながるヒントが豊富にあり、自然の中で山村の生業を伝統的知識体系として学び、学校で伝達された科学的知識体系と統合することによって、持続可能な社会づくりのための新しい価値観を形成し、生きる力を鍛錬することが必要である。

山村民の働き場と都市民の学び場として山村をまるごと環境文化大学として活用することが必要である。山村住民は縄文文化の継承者としての誇りを取り戻し、心広く都市民を受け入れ、都市住民は忙しさにかまけて便利さに溺れずに、自ら暮らす技術を山村で学ぶ。そのことにより、両民相携えて、流域の森、水、生物文化多様性を保全し、真の持続可能な社会を創造することが可能となる。

このため、このことを具体化するためには、山村住民の意識改革と山村における窓口の整理、山村における受け入れ態勢の整備、山村間、山村と都市間のネットワークの形成を図るとと



もに、それらを自主的に運営する NPO 等の育成を図る必要がある。立ち上がりにおける助成を始め、寄付の優遇措置の適用拡大等、経済基盤の確保が可能となる措置がとられることが必要である。

9 山村で生活できる総合的な条件の整備

山村に住みたいと希望する者が心安く生活するためには、生計費の確保はもとより、道路、交通・情報通信、上下水道、電力・ガス等のインフラストラクチャー、および教育、医療、金融等の制度資本が総合的に整備される必要がある。

このうち、インフラストラクチャーについては、これまでの努力により向上してきているが、教育、医療、金融等については後退してきているものもあり、新しい対策が必要になっている。例えば、高校や大学への進学については、経済的負担等が益々大きくなってきており、授業料や下宿料の助成等を行うことが必要である。

このため、山村において生活できる条件を分析し、総合的な条件の整備を図るべきであり、今後の価値観の多様化とリスク分散型社会に対応していくためには、山村が都市住民から選択される新しい居住の場にしていくことが必要である。



山梨県小菅村植物調査標本リスト No.1

武井 尚

Herbarium specimen of Kosuge Village, Yamanashi Prefecture I

Hisashi TAKEI

山梨県小菅村において、『生物資源保全実習』の野外実習として環境教育専攻学生の皆さんが採集した植物標本のリストを順次整理しています。実習のための植物採集については小菅村役場の了解を得て行いました。標本の同定は採集者である学生の皆さんが植物図鑑を見て行いましたが、武井尚先生に再確認、訂正をしていただきました。

このリスト No.1 は武井先生が作成してくださったものです。武井先生は東京学芸大学環境教育研究センターに3万点ほどの植物標本を寄贈してくださいました。10年以上にわたり、毎週1日は、共同研究員としてさく葉室にお越しになり、これらの標本を自ら整理してくださったのです。東京学芸大学の前身であった旧師範学校に学生としておられたときに、標本室がな

く植物分類の研究に支障があり、国立科学博物館に通われたそうです。

武井コレクションは、武井先生が全国各地で採集され、国立科学博物館の高名な学芸員の方々にも同定をお願いされたものが多く、正確な分類がなされています。ご自分が経験された植物分類に関する学習上の苦労を、後輩の東京学芸大学生にさせないために、ご自分で植物標本を収集して、多大な時間をかけて整理してくださいました。

このご業績を含めて、武井尚先生は日本政府から勲章を受けられましたが、本年3月にご逝去なさいました。東京学芸大学の自然史選修および環境教育専攻の学生たちのために、ご指導いただいたことに篤くお礼を申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。（紹介文=木俣美樹男）

山梨県小菅村の植物採集標本リスト No.1

整理番号	科名	種名	採集場所
6	トクサ	スギナ	
20	コバノイシカグマ	ワラビ	橋立、中組
32	イワテンダ	クサソテツ	
102	マツ	ハリモミ	大菩薩峠
		コメツガ	大菩薩峠
104	ヒノキ	ヒノキ	大菩薩峠、橋立
202	クルミ	オニグルミ	橋立
204	カバノキ	オバヤシャブシ	橋立
		クリ	橋立
		ヤシャブシ	橋立
205	ブナ	ミズナラ	大菩薩峠
208	クワ	カナムグラ	小菅の湯周辺
		ヒメコウゾ	橋立
		ヤマグワ	橋立
209	イラクサ	ウワバミソウ	大菩薩峠
		クサコアカソ	大菩薩峠
215	タデ	アレチギシギシ	
		イタドリ	大菩薩峠、中組、橋立
		イヌタデ	
		エゾノギシギシ	橋立、小菅の湯周辺
		ソバ	小菅の湯周辺
		ミヤマタニソバ	大菩薩峠



整理番号	科名	種名	採集場所
222	ナデシコ	カワラナデシコ コハコベ フシグロセンノウ	小菅の湯周辺
	ミドリハコベ ミミナグサ ムシトリナデシコ		橋立
226	モクレン	ホオノキ	橋立
237	キンポウゲ	ヒメカラマツ ヤマオダマキ	大菩薩峠 大菩薩峠
239	アケビ	アケビ	橋立
243	ドクダミ	ドクダミ	橋立、小菅の湯周辺
249	マタタビ	マタタビ	橋立
252	オトギリソウ	オトギリソウ	大菩薩峠
256	ケシ	クサノオウ	小菅の湯周辺
258	アブラナ	イヌガラシ オランダガラシ ワサビ	橋立
263	ベンケイソウ	ツルマンネングサ	
265	ユキノシタ	アカショウマ アジサイ ギンバイソウ クサアジサイ コアジサイ ノリウツギ ハナチダケサシ? ヤマアジサイ ユキノシタ	大菩薩峠 大菩薩峠、橋立 大菩薩峠 大菩薩峠 大菩薩峠 大菩薩峠 大菩薩峠 大菩薩峠
267	バラ	ウメ エビガライチゴ カジイチゴ キンミズヒキ コゴメウツギ シモツケ シモツケソウ ダイコンソウ ナワシロギク ニガイチゴ ノイバラ バライチゴ ヘビイチゴ ミヤマザクラ ミヤマニガイチゴ モミジイチゴ ヤマザクラ ユスラウメ	橋立 橋立 大菩薩峠 大菩薩峠 大菩薩峠 大菩薩峠 小菅の湯周辺 大菩薩峠、橋立 橋立 橋立 大菩薩峠 大菩薩峠、橋立、中組 橋立 中組
268	マメ	キハギ クズ コマツバギ シロツメクサ ツルマメ フジ ムラサキツメクサ メドハギ ヤブハギ ヤブマメ	小菅の湯周辺 小菅の湯周辺 大菩薩峠 大菩薩峠 小菅の湯周辺



整理番号	科名	種名	採集場所
270	カタバミ	カタバミ ムラサキカタバミ	
271	フウロウソウ	ゲンノショウコ タチフウロウ	大菩薩峠 大菩薩峠
278	ミカン	イヌザンショウ サンショウ	橋立 大菩薩峠、橋立、中組
285	ウルシ	ヌルデ	
286	カエデ	イロハモミジ オオモミジ	橋立 橋立
290	ツリフネソウ	キツリフネ ツリフネソウ	大菩薩峠
292	ニシキギ	ツルマサキ	大菩薩峠
293	ミツバウツギ	ミツバウツギ	
297	ブドウ ノ	ブドウ	小菅の湯周辺
306	スマレ	タチツボスマレ	大菩薩峠
314	ウリ	アマチャズル	大菩薩峠
324	アカバナ	タニタデ メマツヨイグサ	大菩薩峠 小菅の湯周辺
329	ミズキ	アオキ ハナイカダ	中組
330	ウコギ	ウド タラノキ	橋立、中組 中組
331	セリ	ウマノミツバ ホタルサイコ ミツバ ヤブジラミ	大菩薩峠、橋立、中組 橋立
332	イワウメ	イワカガミ	大菩薩峠
334	イチヤクソウ	ギンリョウソウ コバノイチヤクソウ	鹿倉山
335	ツツジ	アセビ サツキ サラサドウダン ミツバツツジ ヤマツツジ レンゲツツジ	大菩薩峠 橋立 大菩薩峠 井狩
338	サクラソウ	オカトラノオ	
341	カキノキ	カキノキ	橋立
349	カガイモ	イケマ	大菩薩峠
350	アカネ	アカネ ミヤマムグラ ヤエムグラ ヨツバムグラ	小菅の湯周辺 大菩薩峠
357	シソ	カメバヒキオコシ クルマバナ シソ ヤマタツナミソウ	大菩薩峠 橋立、小菅の湯周辺
358	ナス	ヤマホロシ	
360	ゴマノハグサ	クガイソウ ヒナノウスツボ ヤマクワガタ	大菩薩峠 大菩薩峠
365	イワタバコ	イワタバコ	
370	オオバコ	オオバコ	大菩薩峠、橋立
371	スイカズラ	スイカズラ	
373	オミナエシ	キンレイカ	大菩薩峠
375	キキョウ	ツバナ	大菩薩峠

整理番号	科名	種名	採集場所
377	キク	ツリガネニンジン	大菩薩峠
		ヤマホタルブクロ	
		イワニガナ	大菩薩峠
		ウスユキソウ	
		オオガクビソウ	橋立
		オオヨモギ	
		オニタビラコ	大菩薩峠
		キオン	
		コオモリソウ	大菩薩峠
		コウリンカ	
		サワギク	大菩薩峠
		セイヨウタンポポ	
		ニガナ	大菩薩峠
		ノアザミ	
		ノコンギク	橋立、中組、小菅の湯周辺
		ノブキ	
		ハハコグサ	大菩薩峠
		ハルジョオン	
		フキ	大菩薩峠
		ホソエノアザミ	
モミジガサ	大菩薩峠		
ヤブレガサ			
ヤマハハコ	大菩薩峠		
ユウガギク			
ヨツバヒヨドリ	大菩薩峠、橋立、小菅の湯周辺		
ヨモギ			
409	ユリ	トウギボウシ	大菩薩峠
		ノギラン	
		ノビル	
		ヤマホトトギス	大菩薩峠
414	ヤマノイモ	ヤマノイモ	
421	ツユクサ	ツユクサ	
425	イネ	イヌビエ	大菩薩峠
		エノコログサ	
		オヒシバ	
		ホソムギ	
		アズマネザサ	
		スズタケ	
		モウソウチク	橋立
428	サトイモ	マムシグサ	橋立、中組
合計	60 科	172 種	



彩色園水田の生物調査リスト

小金井環境市民会議 環境学習部会「田んぼの時間」

Flora and Fauna around the paddy field in Saishikien gardens, Tokyo Gakugei University

Environment Learning Group of Citizens council for Environment in Koganei City

小金井環境市民会議の環境学習部会「田んぼの時間」は、生物と共存するための稲作技術を東京学芸大学の彩色園で試験してきました。彩色園は30年以上にわたって、防虫剤や除草剤などの農薬は原則的に散布していません。研究用ガラス室などの試験区でのみ、まれに殺虫剤を散布しました。

環境学習部会の専門家の調査結果の詳細を同部会の許可を得て要約しました。この結果によると、彩色園では生物多様性が回復して、著しく高いことがわかりました。ありきたりの管理をすることで、今となっては、ありきたりではない生物多様性が高まり、都市近郊でも、とても多くの他生物種と共存できる可能性を示すことができました。

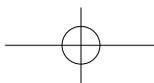
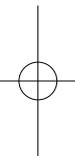
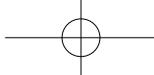
たくさんの学生や教職員の方々とともに環境学習活動・保全活動を行ってきた結果として、深い愛着を持って下さる方々、学生のころからファンであったとお話し下さる卒業生、近隣の市民の皆様はとても多く、著者は40年近く彩色園の保全、育成管理を担当してきて、再来年には定年退職しますが、植物学者として仕事への誇り、達成感、充足感に満たされています。(紹介文=木俣美樹男)

環境教育研究センターの水田周辺の生物多様性

植物		昆虫・動物		水生生物	
科名	種数	科名	種数	科名	種数
イネ	9	イトトンボ	2	ゲンゴロウ	2
オモダカ	1	トンボ	5	トンボ(やご)	1
キク	11	キリギリス	5	イトトンボ(やご)	1
アカバナ	1	コオロギ	3	アマガエル	1
タデ	3	ケラ	1	アカガエル	1
イグサ	1	ヒシバツタ	1	アオガエル	1
マメ	1	オンブバツタ	1	ヒキガエル	1
カタバミ	1	イナゴ	1	モノアラガイ	1
トウダイグサ	2	バツタ	1	サカマキガイ	1
アブラナ	3	セミ	1	ユスリカ	1
アカザ	1	アメンボ	1	イトミミズ	1
ゴマノハグサ	3	イトアメンボ	1	メダカ	1
スベリヒユ	1	シテムシ	1	アメリカザリガニ	1
トクサ	1	ゲンゴロウ	2	合計	14
ツユクサ	1	カブトムシ	1	(監修：平井正風)	
キンポウゲ	1	カナブン	1		
バラ	1	テントウムシ	1		
ドクダミ	1	スズメバチ	3		
セリ	1	ドロバチ	1		
シソ	2	ミツバチ	1		
アカウキクサ	1	ヤマアリ	1		
ミズアオイ	1	ヒラタアブ	1		
アミミドロ	1	ニクバエ	1		
トチカガミ	1	ムシヒキアブ	3		
ホシクサ	1	アゲハチョウ	3		
アワゴケ	1	シロチョウ	3		
アオミドロ	1	シジミチョウ	2		
合計	53	タテハチョウ	2		
(監修：池竹則夫)		ジャノメチョウ	1		
		ハエトリグモ	1		
		コモリグモ	1		
		オカダンゴムシ	1		
		モグラ	1		
		合計	55		
		(監修：高橋利行)			

*東久留米農場を廃止して、小金井農場に水田を造成したのは35年ほど前であった。小金井環境市民会議の皆様の調査結果(2011年6月、7月)に示されているように、これほどまでに生物多様性が豊かに保持されてきたことは素晴らしい。





編集後記

東京郊外の小金井市から愛媛の山奥に引っ越して、2年と少しが過ぎた。生まれ育った場所なので大きな違和感はないが、30年のブランクを経てこちらで過ごす時間は、東京のそれとはまったく異なる。ベースは「半農半編集」という暮らしである。しかし、当然ながら「半」はきっちり「1/2」のところにあるわけではなく、夏場の草が伸び膨大のときや秋の収穫期（大豆や小豆が主。今年は初めて水稻にも挑戦中）には、「農」のほうがウエイトが高くなる。また、「編集」という仕事は東京にいたときのようにはないので、それ以外のときも山の手入れとか道の草刈りなどの「外作業」がけっこう多い。

東京時代は、これからの予定を書くスケジュール帳しか持っていなかったが、こちらに来てからは「何をした」という作業日誌のほうが重要になってきた。農作業はいちばんには気候に左右される。しかし、それは去年はいつ頃タネを蒔いたというような経験知があつてのこと。長い経験から「お盆を過ぎたらソバを蒔く」というように、地方ごとにだいたいの農事暦は決まっているのだ。このように「これから」のことに加えて「これまで」のほうにも目を向けるようになったのは、私にとって都会と山暮らしの違いを象徴する端的な例だと思う。どちらも変わらないのは、パソコンやインターネットのない生活は考えられないということだろうか。私は日々の記録（作業日誌）をパソコン内に格納して、振り返りに役立てている。

そういう暮らしのなかで、今年も木俣先生に声をかけていただき、『民族植物額ノオト』のレイアウト作業をお手伝いさせていただいたことに心から感謝したい。改めて思うのは、植物が人々の暮らしをいかに支えているかということだ。食べる対象としてはもちろん、とくに山暮らしだと、生活のさまざまな場面で周辺の植物を利用しているのである。たとえば、私の母はもうすぐ80歳になるが、毎日のように畑作業をしている。そんな彼女が私に言う。「あそこのクズマイ（クズのこと）は切らんといてや」「わかった。なんかに使うん？」「あそこで枝なんかを束ねるとき、あれがあるとええんよ」。いつもヒモを持ち歩いているわけではないので、基本はそこにあるものを使う。丈夫なクズは、とてもよい縛（しば）りヒモになるのである。

もっと顕著なのは竹であろうか。ある人から、手入れされたものは「竹林」、放置されたものは「竹藪」という区別するという話を聞いて大きくなすいたのだが、その伝でいうと、わが家は間違いなく「竹藪」状態だ。それはともかく、竹ほど山の暮らしに欠かせない植物はないと思われる。そもそも大半の竹は、あとから人間が植えたものだ。大きなモウソウチクは、春には筍として食卓をにぎわせ、夏になると田んぼの水路の樋（とい）になるし、細かな枝の部分はつる性植物の支柱代わりになる。また、大きさが手頃で扱いやすいマダケは細く裂いて使うが、これは野菜にビニールをかぶせたりするときにたいへん重宝する。

昨今、「限界集落」の問題がクローズアップされているが、ここ四国ではそれが顕著で、わが集落も60歳以上の人が全体の半分以上を占める「準限界集落」となっている。周辺には「限界」を通し越して「消滅」へと向かう集落も少なくない。四国の山中をドライブしているとそんな集落に出会うことが多いが、家屋は朽ちても周りに「竹藪！」がいくつか残っていることが多い。ああ、ここにも昔は人が暮らしていたんだな。竹藪はそこに人がいたことを静かに教えてくれる。長い年月がたつとまた別の植物層になるのであろうが、一時の「ヒトの攪乱」を楽しむのも悪くないのかもしれない。そういう思いを抱きながら、今夏も草刈りに精を出す日々が続いている。

宮本幹江
(2012年7月)



民族植物学ノオト 第5号 (2012) ISSN 1880-3881

発行日： 2012年8月31日
発行所： 東京学芸大学 環境教育研究センター 民族植物学研究室
発行責任者：植物と人々の博物館プロジェクト 木俣美樹男
所在地： 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1
東京学芸大学 環境教育研究センター

編集協力 & レイアウト=宮本幹江 [時遊編集舎]

Ethnobotanical Notes No.5 (2012) ISSN 1880-3881

edited by M. Kimata
Laboratory of Ethnobotany and Plants & People Museum,
Field Studies Institute for Environmental Education,
Tokyo Gakugei University,
Koganei, Tokyo 184-8501, Japan

